

水戸市市制施行120周年記念 国際姉妹都市交流シンポジウム
これからの姉妹都市交流のありかた
－市民主導の交流に向けて－



2009年11月1日(日) 水戸市国際交流センター

主催:財団法人水戸市国際交流協会 共催:水戸市

目 次

1. 刊行にあたって	2
2. プログラム	3
3. 主催者あいさつ	4
4. 基調講演「姉妹都市交流の無限の可能性」	5
◆日本語	6
◆英 語	13
◆中国語	20
◆基調講演資料	24
5. 都市紹介	27
◆アメリカ・カリフォルニア州アナハイム市	28
◆中国・重慶市	32
6. パネルディスカッション	41
7. ご意見・ご感想	59

「国際姉妹都市交流シンポジウム」報告書の刊行にあたって

財団法人水戸市国際交流協会 理事長 幡谷 祐一

今日の急速な技術の発展と国の枠を超えた経済活動のグローバル化により、人・物・情報の流れが地球的規模に拡大しています。このような中で近年、私たちを取り巻く環境も大きく変化しています。水戸のまちにも世界中から様々な国籍の人々が来るようになり、同時に水戸市民にとっても観光や仕事で世界のまちを訪れる機会も多くなりました。今後ますます国際化は進むものと考えられ、それは地域レベルや個々の市民生活にも大きく関わってくるものです。市民それぞれが国際化に対応できる能力の向上や国際理解を深めることが必要になるとともに、市民レベルでの国際交流活動が必要になってきます。

加えて社会環境の変化は、国内において地方分権という大きな流れを生み出しました。地方分権の推進にあたっては、自らのまちの課題を自らの手で市民が主体となって解決していくという姿勢が私たち市民一人ひとりに求められています。

水戸市ではこれまで1976年(昭和51年)にアメリカ・アナハイム市と国際親善姉妹都市を、また2000年(平成12年)には中国・重慶市と友好交流都市を結び、それぞれの都市との相互訪問をはじめとした交流が行われてきました。水戸市国際交流協会も、国際交流センターを拠点として水戸市と連携しながら市民主体の国際交流の推進に積極的に取り組んでまいりました。しかし、国際化のさらなる進展や地方分権の時代のなかで、国際交流に関わる分野においてもより多くの市民、NPO、企業などが協力しあいながら、総合的かつ積極的に事業を開拓していくことが必要になってきていると考えます。

今回の国際姉妹都市交流シンポジウムは、そのような背景のもと水戸市が今年市制施行120周年を迎えることを記念し、アナハイム市、重慶市の関係者の皆様をお迎えし、新たな姉妹都市交流のあり方について広く考えることを目的として、水戸市との共催により開催したものです。

シンポジウムにおいては、様々な立場で国際交流に関わってこられたパネリストの皆様によって議論が交わされるとともに、多くの市民の皆さんから活発な質問や意見をいただくことができました。今回その内容を報告書としてまとめました。

「市民主導の国際交流」というテーマに焦点をあてた今回のシンポジウムを契機として、多様な視点から姉妹都市交流の新たな取組みが始まることを期待しております。

最後になりますが、本シンポジウムにご参加、ご協力くださった多くの皆様に主催者を代表して感謝申し上げます。本報告書が水戸市の国際化の発展に、微力ながらもお役に立つことができれば幸いです。

プログラム

14:30

開会

主催者挨拶

大野 文雄 財団法人水戸市国際交流協会副理事長

14:35

基調講演

「姉妹都市交流の無限の可能性」

講演者：毛受 敏浩 財団法人日本国際交流センター
チーフ・プログラム・オフィサー

15:35

休憩（10分間）

15:45

都市紹介（アナハイム市、重慶市）

16:00

パネルディスカッション

コーディネーター：毛受 敏浩 財団法人日本国際交流センター
チーフ・プログラム・オフィサー

パネリスト：ローリー・ギャロウェイ

アナハイム市議会議員

ヘンリー・スーシー

アナハイム市姉妹都市協会前会長

ジョン・グエン

アナハイム市姉妹都市協会理事

吳 昌徳

重慶市政治協商會議弁公庁副庁長

川瀬 由紀子

メサフレンドシップ会長

井上 恵市

水戸コンベンションビューロー事務局長

橋本 耐

水戸市副市長

17:30

閉会



「国際姉妹都市交流シンポジウム」主催者あいさつ



財団法人水戸市国際交流協会 副理事長 大野 文雄

ただいまご紹介いただきました、財団法人水戸市国際交流協会 副理事長の大野でございます。本来ですと、幡谷祐一理事長がご挨拶申し上げるところでございますが、出席できませんので、代わりまして私からご挨拶申し上げます。

本日は、「これから姉妹都市交流のありかたー市民民主導の交流に向けてー」というテーマの下に、国際姉妹都市交流シンポジウムを開催いたしましたところ、このようにたくさんの皆様方にお集まりいただきました。まずもって心よりお礼を申し上げます。

このシンポジウムは、水戸市市制施行120周年を記念し、水戸市の姉妹都市であるアメリカ・アナハイム市と友好交流都市である中国・重慶市の関係者を迎えて、新たな姉妹都市交流のあり方について広く考えることを目的として開催することといたしました。

皆様には既にご承知のとおり、水戸市は国際親善を目的として、1976年にアメリカ・カリフォルニア州・アナハイム市と姉妹都市を締結、また、2000年には、中国・重慶市と友好交流都市を結び、それぞれの都市との交流を通して、異文化理解を深め、開かれた地域社会づくりへの契機となることを願い、相互訪問による交流を進めてまいりました。

今後は、これまで培ってきた姉妹都市・友好交流都市の信頼関係を基に、互いの都市が異なる視点から姉妹都市交流の新しい展開を考えていくことが必要ではないかと思います。後ほど、紹介があろうかと思いますが、本日はこれまでそれぞれの立場で国際交流に関わってこられた皆様を、講師あるいはパネリストとしてお迎えいたしました。それぞれの立場から、姉妹都市・友好交流都市の関係について考えていただき、このシンポジウムを出発点として次の新しい活動が始まる 것을期待したいと思います。

終わりに、本日のシンポジウム、少し長い時間となりますが、皆様方にとって意義ある時間となりますよう祈念申し上げますとともに、皆様方に重ねてお礼を申し上げまして、私のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

基調講演

これから

姉妹都市の無限の可能性



基調講演

姉妹都市交流の無限の可能性



財団法人 日本国際交流センター
チーフ・プログラムオフィサー 毛受 敏浩

【プロフィール】・・・・・・・・・・・・・・・・

兵庫県庁に10年間勤務後、民間によって設立された非営利団体（財）日本国際交流センターで草の根レベルの国際交流や国際協力活動のコーディネーションと調査研究に取り組む。2003年に全国各地の地域社会で国際的な活動に携わる人々が一堂に会する「国際交流・協力実践者全国会議」をJICA等の協力を得て組織し、第一回および第三回の委員長を務める。慶應大学法学部卒。兵庫県庁から派遣され米国ワシントン州立エバグリーン大学大学院で姉妹都市交流を研究。同大学院行政管理学修士。2008年にカンザスシティで行われた全米姉妹都市協会（Sister Cities International）の年次総会で日本の姉妹都市の現状について講演。慶應大学、静岡文化芸術大学の非常勤講師（NPO、NGO論）を歴任。編著書に「国際交流・協力活動入門講座I～IV」（明石書店）、「地球市民ネットワーク」（アルク）、「自治体変革の現実と政策」（中央法規）など。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

みなさん、こんにちは。ご紹介をいただきました（財）日本国際交流センターの毛受敏浩と申します。

今日は、国際姉妹都市交流シンポジウムということで、私の話のあと、水戸市の姉妹都市であるアメリカのアナハイムと中国の重慶の代表者を交えてパネルディスカッションが行われます。

姉妹都市のあり方について今日はじっくりと考え、そしてこれから水戸市の姉妹都市交流をどのように発展させていくのかについて考える機会になればと考えております。どうぞよろしくお願ひいたします。

私の話の演題は「姉妹都市交流の無限の可能性」となっています。そもそも姉妹都市とは一体、どのようなものなのか、どのような活動が望ましいのかということを考えてみたいと思います。

最初にお話したいのが、まず姉妹都市の歴史についてです。

世界で最も古い姉妹都市はどこか？というところから話を始めたいと思います。



世界で最も古い姉妹都市は、スイスのベルンとアメリカのニューベルンの間の姉妹都市だといわれています。1770年代にスイスのベルンからアメリカにわたった移民たちによってニューベルンの町は主として形成されたので、ベルンとニューベルンの間に、家族や親せき、友人などの自然な交流があったようです。そして1893年に二つの町は姉妹都市提携を結びます。これは移民元と移民先ということで自然にこれまで行われていた町同士

が姉妹都市という正式な形で交流をすることを宣言したものといえます。

このようにアメリカではヨーロッパの都市との間で自然発生的に姉妹都市が行われていましたが、これを国の政策として発展させたのが第二次世界大戦が終わった後のアメリカの大統領、アイゼンハワーです。アイゼンハワー大統領は、アメリカとソ連の間で冷戦が始まり、緊張関係が生まれていた時代に、市民や町の国境を越えた交流こそが世界の平和の土台になるとして、ピープルツーピープル外交を推進しようとします。国を越えた市民交流が世界の平和をもたらすと信じ、彼はそれまで自然発生的に行われていた姉妹都市交流をアメリカの外交の一つの柱として推進しようとします。

そうしたアメリカの影響を受けて、1955年に日本で最初の姉妹都市提携が生まれます。長崎市とアメリカのセントポールです。1955年12月7日が姉妹都市締結の日ですが、この日はアメリカにとっては日米開戦の日です。原爆が落とされた長崎と日米開戦の日にアメリカが日本の都市と姉妹都市を締結するということは、戦争のわだかまりを地域同士、市民同士が交流することで平和を築いていくという強い意志があったと考えてよいでしょう。

さて、その後、アメリカからの誘いで始まった姉妹都市交流に対して、日本の各地の自治体は積極的に参加するようになります。当時は一般的日本人が海外旅行をすることが極めて難しい時代でした。また海外から日本にやってくる外国人もきわめて少ない時代でした。こうした時代に姉妹都市提携をすることで、海外に行き日本にない進んだ制度や仕組みを学んで帰ってくることができたのです。また姉妹都市交流を通じて日本に外国人を招き入れ、ホームステイを行ったりすることで外国を身近なものにするという効果がありました。

1950年代、60年代は姉妹都市の相手先は欧米の都市がほとんどでしたが、1970年代、80年代になるとアジアの国々、中国や韓国との姉妹提携も急速に増えています。

日本と中国の国交の回復は1972年9月ですが、その翌年、1973年6月に日本と中国の最初の姉妹都市ができます。神戸と天津です。神戸はご承知のように華僑の多い町で、神戸は日本中国交回復の前から中国と姉妹都市ができるかと考えていたようです。その後、日中の間で姉妹都市（中国では友好都市といいます）交流が盛んになっていきますが、天津と神戸との姉妹都市は中国にとって最初の姉妹都市でした。ですから、日本の自治体が中国の都市を国際交流の場に導き出したといえるのかもしれません。そして、その後、中国は日本と同じ

レベルか、あるいは今では日本以上に熱心に姉妹都市交流を発展させていきます。

ここで3カ国の姉妹都市交流についての取り組み方の特徴を見てみましょう。

アメリカ・・・市民が活動の中心、自治体はあまり関与しない、自治体の予算もない、市民による人と人の交流が世界平和を作るという思いが強い。昨年、アメリカの全米姉妹都市協会の年次総会に参加しましたが、アイゼンハワー大統領の理念をいまだに強く感じておられるアメリカ人が多いことに感銘を受けました。

中国・・・地方政府が海外との交流によって行政や企業の発展を図ろうとする。戦略的な取り組みを自治体が行っている。スタッフも語学ができ長期的に配属された専門家が交流の担い手になっている。

日本・・・中国とアメリカの中間のタイプ。これまで自治体が中心に活動をしてきた。今は自治体から民間へ移行を考えているところが多い。市民との協働がテーマになっている。

さて、現在の日本の姉妹都市交流について見てみましょう。下の図（P24右下）を見ていただくとわかるように、日本の姉妹都市交流は平成の最初のころには毎年、60件から70件の新しい姉妹都市提携が行われるといった状況がありました。現在は新しい姉妹都市交流は少なくなっています。

その理由の一つは市町村合併が行われたこと。平成の大合併といわれるような大きな変化が起り、1999年3月末に3,232あった市町村の数は、2006年4月には1,820にまで減少しました。こうした自治体自身が変わる中で、なかなか新たに姉妹都市提携をしようという判断は生まれません。

もう一つは自治体の財政難です。多くの自治体が財政上の問題を抱えている中、国際交流というすぐに成果の現れにくい姉妹都市交流の予算は減らされがちです。ですから、新たに姉妹都市交流を行うという意欲もなかなかわいてこないのが実態だと思います。さてここで姉妹都市の定義について考えたいと思います。自治体国際化協会は姉妹都市交流についてのデータを集めていますが、そこで姉妹都市についての条件として、（1）両首長による提携書があること、（2）交流分野が特定のものに限られていないこと、（3）交流するに当たって、何らかの予算措置が必要になるものと考えられることから、議会の承認を得ていることをあげていますが、姉妹都市交流とは何かについては記述がありません。

そこで以下のような定義を考えてみま

した。

定義

「姉妹都市は、国家間の外交という形式を離れて人種・宗教・政治的イデオロギーの相違を超えて、市民同士が直接ふれあい相互の理解を深め尊敬と友情の絆を強めることによって、多様な分野で人や情報などの交流を通じて世界平和への貢献と相互の地域の発展を目的として行



われる対等な地域同士の連携」

重要なのは

- (1) 立場の違いを超えて交流をするということ
- (2) 国家ではなく市民が直接ふれあい交流する
- (3) 世界平和と相互の地域の発展
- (4) 対等な地域の連携

です。

さて、姉妹都市交流の実際的な活動について考えてみたいと思います。姉妹都市交流として主に4つの分野があります。

一つは青少年交流です。これは姉妹都市交流の定番ともいってよいもので、特に英語圏との姉妹都市交流ではなくてはならないものです。青少年の頭が柔軟な時代に、姉妹都市交流を通じて海外に行き、さまざまな経験をすること、そのことが青少年のその後の将来に大きな刺激を与えます。単に英語の勉強に役立つというだけではなく、異文化の中で生活するということはどういうことか、そして自分自身、自分の町、自分の国を考え直すきっかけとなる大きなチャンスです。

しかし、通常の青少年交流では海外にいける生徒の数は限られます。むしろ、参加できない学生の方が圧倒的に多くなります。そこで青少年交流に加えて、学校同士が姉妹校になり、経常的に交流をするというしくみを持つことが大切です。学校同士、幅広い生徒同士が交流をしておれば、仮に相手の国にいける生徒の数が限られていたとしても、学校やクラスの代表としてみんなのメッセージを持っていくこともできるはずです。一人の経験を多くの青少年が共有できるような交流が必要です。

さて、次に文化交流があります。姉妹都市交流で通常行われる文化交流は、地元の伝統芸能を相手の姉妹都市で披露したり、音楽などのサークルやダンスグループが現地で公演をするといったことがあります。文化交流というと、普通の市民は参加しにくいと感じてしまうかもしれません、趣味や道楽も文化です。たとえば、習字も中国と日本の間では交流ができるでしょう。またアメリカでやれば一種のパフォーマンスになります。園芸の趣味の人も多いと思いますが、家庭菜園やガーデニングをテーマにして交流するというはどうでしょうか？あるいは犬や猫といったペットをテーマにした交流も考えられます。日々の暮らしの中にあるものそれが文化です。そうした糸口を見つければ、遠い外国にある姉妹都市、そしてそこに住む人々がぐっと身近になってきます。

また経済交流があります。経済交流は市民というより自治体にとって関心の高い分野です。地域経済の活性化ということが世界的に課題になっています。姉妹都市を使って経済の活性化ができればたいへんよいことになります。

多くの姉妹都市の間で、お互いの商品を相手都市で販売できないか、貿易につなげられないかということで試みが行われてきました。しかし、たいていの場合は失敗するか、きわめて小規模なレベルに留まっています。なぜなら、訪問した姉妹都市からお土産品を買ってくる程度ならよいのですが、規模が大きな取引となると、商売の相手を姉妹都市だけに限って

しまうと無理があります。行うとすれば、海外で仕事をするときの一つの窓口であったり、協力者の一つとして姉妹都市を考えるとよいでしょう。

経済交流で重要な点は、商工会議所や青年会議所といった地元の経済関係者が姉妹都市を訪れ、そこで新しいトレンドを自分の目で見ること、そして新しい発想や考えに触れることです。アメリカで売れているものをそのまま日本に入れてでも売れるかどうかはわかりません。しか

し、常に世界に目が向いて新しい情報を得ようという姿勢を持つ意味で、姉妹都市から多くのことが学べるはずです。

さらに課題解決型の交流があります。自分の地域で困っていること、解決が困難なことのヒントを姉妹都市から得ようとするものです。日本の今の最大の課題といえば何でしょうか？少子高齢化や過疎化といったことがテーマになるかもしれません。また環境問題や商店街の活性化もそうかもしれません。こうした地域が悩んでいる具体的なテーマを決めて、それを相手の都市の同じ立場の人たちと意見交換の場を持ったり、現地を訪問してその対応から学ぶというのが課題解決型の交流です。

岡山市とアメリカのサンノゼとの姉妹都市交流では、家庭内暴力（DV）という重いテーマをもとに交流をしました。実際に、DVを担当している人がサンノゼを訪問し、現地のNPOのDV施設を訪問し、担当者から詳しく話を聞き、意見交換をすることができました。DVというデリケートで複雑な問題に対してオープンにこうした施設の見学ができたのは、姉妹都市という関係があったからこそともいえます。

これまで姉妹都市への視察は行われてきましたが、課題解決型交流は、課題について十分な問題意識と解決の意欲を持った人同士が交流することで深い結びつきが生まれ、そのことが姉妹都市交流自体の中身の充実にもつながるものです。

さて、優秀な姉妹都市交流の活動を表彰しようという総務大臣姉妹自治体交流表彰という制度が平成18年度から始まりました。その選考委員をさせていただいておりますが、これまで受賞した団体について見てみるといくつかの特色があります。

1. 地域ぐるみの交流になっていること

昨年、総務大臣表彰を受けた町に、北海道の当別町という人口2万人の町があります。この町はスウェーデンのレクサンドという小さな町と交流をしています。なぜそのような小さな町同士の姉妹提携が表彰を受けるようになったかというと、小さな町だからこそといえますが、町のさまざまな人たちが交流に参加をしているということがあげられます。当別町では北欧の代表的なお祭りである「夏至祭」の開催、経済団体や青少年による相互訪問等、着



実に交流を重ねています。中でも、25回目を迎えた「夏至祭」は、これら姉妹都市交流の証として継続されており、本場の精神を受け継ぐ全国的にも数少ないお祭りとなっています。また来日したスウェーデン国王がわざわざ当別町を訪問するなど、日本とスウェーデンの交流のシンボルともなっています。

2. 地域の活性化に役になっていること

次に交流が町の活性化に役に立っていることがあります。活性化に役立つといつても直接的なものから間接的なものまでさまざまな形があります。昨年、総務大臣賞を受けた飛騨の高山市はアメリカのデンバーと1960年から姉妹都市提携をしています。50年近い歴史を持つ提携ですが、デンバーとの間では、親善使節団の相互派遣を始め、文化、スポーツ、教育、経済分野等、幅広い交流が行われてきました。そうした長い間の海外との交流が、現在、高山が国際観光都市として、毎年14万人の外国人を受け入れる土台を作ることにつながっています。50年にわたって姉妹都市を通じて海外と交流してきたさまざまな経験が外国人を受け入れる際にも役に立っているのです。

3. 新しいアイデアや取り組みが行われ交流が進化し続けていること

姉妹都市交流で重要なことはマンネリに陥らないことです。常に新しいアイデアや考えを取り入れ新鮮でなければなりません。私自身が姉妹都市の縁結び役を果たした自治体に岩手県の花巻市とアメリカのアーカンソー州のホットスプリングスの姉妹提携があります。両方とも温泉の出る町で、ホットスプリングスはアルカポネが湯治に訪れたことがあるというユニークな温泉町です。

花巻市はホットスプリングスに高校生を毎年派遣していますが、新しい試みを最近始めました。それは環境問題をテーマにした交流をしようということです。「カーボンオフセット」と呼ばれる活動をしようと考えたのです。カーボンオフセットというには、自分たちが排出したCO₂などの温室効果ガスを別の場所で間接的に減らそうという運動です。姉妹都市に行くとジェット機に乗りますが、そうすると大量のCO₂を排出することになります。高校生は姉妹都市に行くことでどれだけのCO₂の排出があるのかを考えて、それを補うために植林を行うという活動を姉妹都市の高校生とともに行っています。このように今の時代に求められるテーマや関心事をうまく姉妹都市提携に取り込むことで交流自体も活性化が進みます。

さて姉妹都市交流はさまざまな分野での交流があるという話をしましたが、姉妹都市交流自体は目的ではなく、あくまで道具であると考えています。世界平和や地域の活性化に役に立つ道具です。



あくまで道具ですので、それを使いこなせるかどうかは、使う人次第です。つまり、姉妹都市交流について4つの分野での交流の話をしましたが、そういうっても実際にうまくいかない、成果が上がらないとすれば、それは姉妹都市交流自体がよくないからではなく、それに携わっている人自身にも問題があるということになります。

姉妹都市交流という道具をどこまで使いこなせるのか、これが重要なポイントです。今日は、水戸だけではなく、姉妹都市の相手先の重慶、アナハイムからの担当者もお見えです。姉妹都市交流をどのように使うことができるのかを実際に担当者同士が顔をあわせて議論をする格好の場だと思います。国や都市によって姉妹都市交流についての考え方も違います。その違いをお互いに理解したうえで、お互いにとって有益な交流をどのようにして作っていくかを話し合うことが大切です。また自治体や限られた人たちだけの間で、姉妹都市のあり方を考えるのではなく、幅広い市民の人が参加し考えるということが大切です。その意味で、水戸市が今回のシンポジウムの企画をする意味は大きいといえます。

Infinite possibilities for exchange between sister cities

Japan Center for International Exchange (JCIE)
Chief Program Officer: Toshihiro Menju

Hello everyone. I am Toshihiro Menju of the Japan Center for International Exchange.

Today, as part of this international sister city exchange symposium, after I have had this opportunity to speak to you, we will be holding a panel discussion with representatives from Anaheim in U.S.A and Chongqing in China, which are both sister cities of Mito.

I am hoping that this day will provide an opportunity for us to fully debate how sister cities should be and how Mito's sister city exchange programs can be further developed. I thank you in advance for your input.

The theme for my talk is "Infinite possibilities for exchange between sister cities". First, let us consider what sister cities actually are and what activities are desirable.

I would first like to talk about the history of sister cities.

To begin with, "Where are the oldest sister cities in the world?"

The oldest sister city relationship in the world is said to be between Bern in Switzerland and New Bern in America. In the 1770s, the town of New Bern was established mainly by immigrants who traveled from Bern in Switzerland to America. So naturally, between Bern and New Bern, there was some exchange between family members, relatives and friends. Subsequently, in 1893, these two cities entered a sister town relationship. This can be considered a declaration of the intent for exchange under a formal relationship as sister cities in place of the exchange that had until then taken place in the form of natural exchanges between the people who immigrated and the people who stayed behind.

In this way, in America, sister city relationships with cities in Europe were established naturally, and the establishment of these relationships was eventually developed into national policy after World War II by President Eisenhower. With the beginning of the cold war between America and the Soviet Union, and the tense relationship between these two nations, President Eisenhower promoted people-to-people diplomacy on the basis that the foundation for world peace could be built on cross-border exchange between citizens and cities. In the belief that cross-border exchange between citizens would bring about world peace,

Eisenhower began to promote the hitherto naturally occurring sister city exchange as one of the supporting pillars of American diplomacy.

Influenced by this American stance, the first sister city relationship involving a

Japanese city was established in 1955. This was between the cities of Nagasaki and St. Paul in America. This sister city relationship was established on December 7, 1955, and for America, this date coincides with the outbreak of war between Japan and America. The fact that America chose to establish this sister city relationship with Nagasaki, a Japanese city destroyed by an A-bomb, on the day of the outbreak of the war between Japan and America, suggests a strong will to counter the lingering bad-blood of the war and forge a peace through exchange between regions and citizens.

Following on, local authorities throughout Japan came to participate actively in the sister city exchanges that were initiated by invitation from America. At the time, it was extremely difficult for general members of the Japanese public to travel overseas, and there were also very few foreign visitors coming to Japan. In such times, the establishment of sister city relationships allowed people to travel abroad to study advanced social systems and mechanisms that did not exist in Japan, and bring this knowledge home. In addition, sister city exchanges made it possible to attract overseas visitors to Japan, while home-stay programs, etc, had the effect of bringing the overseas closer to home.

Although the majority of sister cities to Japanese cities in the 1950' s and 1960' s were either America or European, the 1970' s and 1980' s saw a rapid rise in the establishment of sister city relationships with China, Korea and other Asian countries.

Diplomatic relations between China and Japan were restored in September 1972, and the first sister city relationship between China and Japan was established in the following year (June, 1973) between Tianjin and Kobe. As you may know, Kobe has an established population of Chinese expatriates, and it seems that Kobe had been considering the establishment of sister city relations with China even before the restoration of diplomatic ties. While the establishment of sister city relationships between China and Japan (known as "friendship cities" in China) subsequently became popular, this sister city relationship between Tianjin and Kobe was China' s first sister city relationship. So, it can be said that Japan' s local authorities were instrumental in guiding China' s cities to the arena of international exchange. Since this time, China has shown the same or perhaps an even greater level of enthusiasm in their approach to the development of sister city exchange programs.

Let us now take a look at the approach to sister city exchange in the three countries.

America --- Activities are focused on the city's citizens, there is little involvement of local authorities, local authorities do not have funding, and there is a strong feeling that world-peace will be achieved through person-to-person exchange between citizens. Last year, I had the opportunity to participate in the annual assembly of Sister City International, and I was greatly impressed by the large number of people who still feel strongly about President Eisenhower' s ethos.

China --- Local governments seek to develop administrative methods and industry through international exchange. A strategic approach is taken by local authorities. Staff have linguistic ability, and exchanges are led by long-term placement specialists.

Japan --- Japan's stance falls midway between that of America and China. Until now, activities have centered on local authorities. There are now many places that are considering a shift from local authority centered activity to private sector activity. The underlying theme now is cooperation with citizens.

Now then, let us take a look at current sister city exchange programs in Japan. As you can see from the diagram below, at around the time of the start of the Heisei era (late 80's onwards), new sister city relationships in Japan were established at a rate of about 60 to 70 per year. There are fewer new sister city exchange programs established today.

One of the reasons for this is the merging of municipalities. A major change, known as the "great merger of Heisei" occurred, and the number of municipalities was reduced from 3,232 at end-March 1999 to 1,820 by April 2006. With such changes in the local authorities themselves, decisions to enter new sister city relationships were not forthcoming.

Another reason is the financial difficulties faced by the local authorities. With many local authorities facing financial issues, budgets for programs such as international exchange that do not show immediate results tend to be downgraded. Consequently, the motivation to undertake new sister city exchange programs is also not forthcoming. At this point, I would like to consider the definition of "Sister Cities". The Council of Local Authorities for International Relations(CLAIR) compiles data on sister city exchange, and has put forward three conditions for sister city relationships; 1) the existence of a sister city relationship document signed by both mayors, 2) that exchange activities are not limited to specific fields, 3) government approval in view of the budgetary provisions that may be considered necessary when engaging in exchange activities. However, there are no descriptions as to what constitutes sister city exchange.

Consequently, I have given thought to the following definition.

Definition

"Sister cities stand apart from the format of diplomatic relations between nations and beyond differences in racial, religious and political ideologies to deepen understanding through direct contact between citizens and strengthen the bonds of mutual respect and friendship through a relationship between regions as equals, undertaken for the purpose of contributing to world peace and the mutual development of these regions through the exchange of people and information across a diverse range of fields."

The important points are

- (1) Exchange that goes beyond differences in perspective

- (2) Direct exchange between citizens, not nations
- (3) Promotion of world peace and mutual regional development
- (4) Relationships between “equal” regions

Now, let us consider actual sister city exchange activities. There are four main fields of sister city exchange.

One is the exchange of young people. This can be considered a standard activity of sister city exchange, and is particularly indispensable in terms of sister city exchange with English-speaking cities. At a time when the minds of young people are still flexible, traveling overseas through sister city exchange programs and the various experiences that this involves can provide great stimulus in view of the future of the youth. Not only is this helpful in terms of English language studies, it also provides a great opportunity to experience life in a different cultural setting, and a chance to reconsider oneself, one's town and one's country.

However, under normal youth exchange programs, the number of students able to travel abroad is limited. If anything, the number of students who cannot participate is overwhelmingly higher. Consequently, in addition to youth exchange, it is important for schools to establish sister school relationships and establish regular exchange mechanisms. With regular exchange between schools and a wider range of students, even if the number of students who are able to travel to the sister city's country is limited, those who do travel can represent their school or class and take messages from everyone to their counterparts. An exchange system that allows the experience of one youth to be shared by many is needed.

Now then, the next item is cultural exchange. The cultural exchange normally undertaken in sister city exchange programs involves the introduction of local traditional performing arts to the sister city, or performances by musical or dance groups, etc.

“Cultural exchange” may seem like something that normal citizens may feel to be difficult to participate in, but hobbies and interests also constitute culture. For example, China and Japan can conduct cultural exchanges on calligraphy. With America, certain types of artistic performance can be considered. Many people have horticultural hobbies, so perhaps exchanges can be made on themes such as home vegetable growing or general gardening? Exchanges on pet based themes such as cats or dogs can also be considered. Culture is what you find in everyday life. Once a mutual interest is found, the people living in the sister city in a far away country will feel that much closer.

There is also economic exchange. Economic exchange is a field that garners more interest from local authorities than from citizens. The revitalization of rural economies has become a global issue. It would be wonderful if sister city relationships could be used to revitalize economies.

There have been many attempts between many sister cities to sell each other local produce, or to link their relationship to commerce. However, in most cases these attempts have either failed or have ended up as very small scale endeavors. This is because, although bringing home gifts from a visited sister city is fine, it is difficult to accommodate any business transaction on a larger scale when the target demographic is limited to a single sister city. So if business is to be attempted, it would be better to consider the sister city a base for operations or a partner.

In terms of economic exchange, it is important for representatives from local economic parties such as chambers of commerce, junior chambers, etc, to visit the sister cities and see the new trends for themselves, and come into contact with new ideas and concepts. A product that is selling well in America may not necessarily sell well in Japan. However, in terms of maintaining a stance that is constantly looking out to the world for new information, a lot can be learned from a sister city.

In addition, there is also problem solving style exchange. This is when a clue to a possible solution to a problem or difficulty being experienced by a region is provided by a sister city. So what are the greatest issues being faced by Japan today? The themes here could well be declining birthrate and aging population or depopulation, or perhaps environmental issues or the revitalization of shopping districts. Problem solving style exchange is when a specific theme that is troubling a region is determined and people from the troubled region set up opportunities to exchange opinions with their corresponding counterparts in the sister city and visit them to learn from the approaches taken.

Sister city exchanges between Okayama and San Jose in America took up the serious theme of domestic violence(DV). The appointed officer for DV was able to visit San Jose, visit the DV facilities of the local NPO, engage in detailed discussions with the local DV officer, and exchange opinions. Even with such a delicate and complicated issue such as DV, I believe that this officer was able to openly visit the facility because of the sister city relationship between Okayama and San Jose.

Although visits to sister cities have been conducted until now, with problem solving type exchanges, the exchange is between people with high problem consciousness with a strong desire to solve problems. This creates a strong bond between these people, and this in turn enhances the content of sister city exchange.

Now then, in 2006 (18th year of Heisei), an award system called the “International Affiliation Exchange Commendation (Minister of Internal Communications Award)” was established for exceptional sister city exchange activities. I have the privilege of being a selector for this award, and there are a number of distinct characteristics present in the groups that have received this award to date.

1. Exchange involving the entire region

Last year, a town with a population of 20,000 called Tobetsu-cho in Hokkaido received the Minister of Internal Communications Award. This town has an exchange program with a small town in Sweden called Leksand. So why did this sister city relationship between two small towns receive this award? Although this may be something that was possible because the towns are small, a wide variety of people throughout these towns participated in the exchange activities. Tobetsu-cho holds the Summer Solstice Festival typically held in northern Europe, and has also implemented mutual visits by economic organizations and young people, and has maintained a steadily progressing exchange program. Of these, the Summer Solstice Festival, which has reached its 25th year, is continued as a symbol of the sister city exchange and is one of the few such festivals in Japan that has an authentic northern European spirit. Furthermore, the King of Sweden made a point of visiting Tobetsu-cho when he visited Japan. Tobetsu-cho has become a symbol of the exchange between Japan and Sweden.

2. Fulfilling a role in the revitalization of the region

Next, there are cases where exchange provides support for the revitalization of the towns. There are a variety of direct and indirect formats that support the revitalization of a town. Hida-Takayama city, which received the Minister of Internal Communications Award last year, has been a sister city of Denver in America since 1960. This relationship, spanning almost 50 years, has involved the mutual dispatch of goodwill groups and has seen a wide range of exchange activities covering culture, sports, education and economy, etc. This long-term overseas exchange relationship helped to build the foundations that led to Hida-Takayama's current status as an international tourism destination accommodating 140,000 overseas visitors every year. The wide ranging experience gained over fifty years through overseas exchange with a sister city is also proving useful when welcoming overseas visitors.

3. Continuous evolution of exchange formats through new ideas and approaches

An important aspect of sister city exchange is the avoidance of stereotyped activities. Exchanges must remain fresh with the constant introduction of new ideas and concepts. One sister city relationship for which I personally fulfilled the role of matchmaker is the relationship between Hanamaki city in Iwate prefecture and Hot Springs in Arkansas, in America. Both of these towns boast hot springs, and Hot Springs is a unique spa town where Al Capone is said to have come to recuperate.

Although Hanamaki sends high school students to Hot Springs every year, a new approach has recently been introduced. This new approach adopts environmental issues as the exchange theme, and will involve activities known as "Carbon Offset" projects.

Carbon offsetting is an activity whereby emissions of greenhouse gases such as CO₂ caused by people are indirectly reduced by actions taken at another location. Jet planes are used to travel to sister cities and this creates high volumes of CO₂ emissions. The high school students consider how much CO₂ emissions are attributable to their trip to the sister city, and undertake tree planting activities in the sister city together with the local high school students to offset emissions. In this way, themes and topics of interest that are relevant to this age are skillfully introduced into the sister city relationship so that the exchange activities themselves are revitalized.

Now then, although I have spoken about the various fields of exchange activities that are undertaken in sister city exchange programs, sister city exchange is not the objective, it is merely the tool. It is a tool that is instrumental in the pursuit of world peace and regional revitalization, and as a tool, whether it is used well or not is up to the people using it. In other words, if none of the four fields of exchange that I have talked about with regards to sister city exchange work well in practice and favorable results are not forthcoming, this is not because the sister city exchange itself is not good, the problem lies with the people engaged in the exchange.

Just how well the tool “sister city exchange” is used is a very important point. Today, representatives of Mito have been joined by representatives from the sister cities of Chungking and Anaheim. This is an excellent opportunity for the representatives from these three cities to put their heads together to debate how sister city exchange should be utilized. The way each country and city views sister city exchange is different. It is important that the parties involved gain a mutual understanding of each others’ differences and then discuss how to establish mutually beneficial exchange. In addition, considerations concerning how sister cities should be should not be limited to just a few select people representing local authorities, etc. Participation and input from a wide range of citizens is important. In this context, there is great promise in the planning of this symposium by the people pf Mito.

姐妹城市交流的无限可能性

财团法人 日本国际交流中心
首席项目官 毛受敏浩

各位来宾，大家好。我就是刚才承蒙介绍的财团法人日本国际交流中心的毛受敏浩。

今天是国际姐妹城市交流研讨会，在我发言之后，水户市的姐妹城市美国的阿纳海姆市和中国重庆市的代表将一起进行分组讨论。

我觉得今天是一个仔细探讨姐妹城市的应有形态以及未来如何促进水户市的姐妹城市间交流的大好机会。请多关照。

我讲演的题目是“姐妹城市交流的无限可能性”。我想探究一下姐妹城市究竟是什么？开展怎样的活动是比较理想的。

首先我要谈的是姐妹城市的历史。

我想先从世界上最古老的姐妹城市是哪里谈起。

世界上最古老的姐妹城市据说是瑞士的伯尔尼市和美国的新伯尔尼市。新伯尔尼市是在18世纪70年代主要由从瑞士的伯尔尼市迁来美国的移民聚居而成的，因此伯尔尼和新伯尔尼之间存在着家人、亲戚、朋友等自然的联系交流。1893年两个城市结成姐妹城市。可以说它开启了将移民来源地与移居地间自然形成的城市关系以姐妹城市这一正式形式确定下来并进行交流的先河。

就这样在美国与欧洲的城市之间自然形成了一些姐妹城市，而将其作为一项国策加以发展是在第二次世界大战结束之后由美国总统艾森豪威尔实现的。艾森豪威尔总统准备在美苏冷战爆发、国际关系紧张的时代，以市民和城市超越国界的交流作为世界和平的平台，推行人民对人民的外交。他坚信超越国家的市民的交流能够带来世界和平，并将此前自然发展起来的姐妹城市交流作为美国外交的一大支柱加以推进。

受到美国的这一政策的影响，1955年日本也出现了首个姐妹城市——长崎市与美国的圣保罗市。1955年12月7日为姐妹城市缔结日，这一天对于美国来说曾是日美开战日。美国在日美开战日与被投放过原子弹的长崎市缔结姐妹城市这件事本身就蕴含了消除战争隔阂，通过地区、市民间的交流构建和平的强烈意志。

之后对于美国发起的姐妹城市交流活动，日本各地的自治体（地方政府）都积极参与。那还是一般日本人很难进行外海旅行、而且鲜有外国人来到日本的年代。在那样的时代建立姐妹城市关系，使得日本人能够前往海外学习日本没有的先进制度和组织结构，并将其带回国内。同时，通过姐妹城市交流，还邀请了外国人来到日本，而家庭寄宿活动又使外国对于日本人来说变得不再遥不可及。

二十世纪五、六十年代，日本的姐妹城市的对象几乎都是欧美城市，但到了二十世纪七、八十年代，日本与亚洲各国如中国和韩国缔结姐妹城市的活动也迅速增加了起来。

日本与中国恢复邦交是在1972年的9月，但翌年的6月日本与中国之间建立了首对姐妹城市—

——神户与天津。神户如各位所知是个华侨众多的城市，在中日邦交正常化之前神户就曾考虑与中国的城市结成姐妹城市。之后日中两国间的姐妹城市（在中国叫做友好城市）交流兴盛，而天津和神户是日本与中国缔结的首对姐妹城市。因此或许可以说是日本的自治体将中国的城市带入了国际交流领域。在此之后中国与日本一样，或者说如今比日本更加热衷于发展姐妹城市交流。

下面我们看一下三个国家姐妹城市交流的运作方式的特点。

美国...市民是活动的主体，自治体几乎不参与，也不提供预算，通过市民间的交流实现世界和平的意愿强烈。去年我参加了美国的全美姐妹城市协会的年度大会，深感如今仍有许多美国人铭记着艾森豪威尔总统的理念。

中国...地方政府想通过与海外的交流谋求行政和企业的发展。由地方政府实施战略措施。工作人员懂外语，长期配备专家负责交流。

日本...属介于中国与美国中间的类型。以往是以自治体为中心开展活动。如今很多地方在考虑由自治体转向民间。与市民的一起开展工作成为了重点。

下面我们看一下如今日本姐妹城市交流的情况。从下图可以看出，日本姐妹城市交流在平成初期（1989年为平成元年）每年都有六十到七十个日本城市与国外城市结成姐妹城市。但现在新的姐妹城市交流不断减少。

其原因之一是市町（镇）村合并。日本发生了被称为平成大合并的巨大变化，1999年3月末的市镇村数量为3,232个，而到了2006年4月该数量已减少到1,820个。这种自治体本身的变化使得各地一直无法做出缔结新的姐妹城市的决定。

还有一点原因就是自治体财政困难。多数自治体都存在财政问题，因此就很容易削减对难以立见成效的姐妹城市交流这一国际交流活动的预算投资。由此也就很难激发开展新的姐妹城市交流的热情。在此我想整理一下姐妹城市的定义。日本自治体国际化协会收集了关于姐妹城市交流的数据，对作为姐妹城市的条件列举了如下几点：（1）要有双方最高领导签署的合作书，（2）不特定交流领域，（3）交流时会需要某些预算措施，鉴于此通常需征得议会同意；但是对于什么是姐妹城市交流该协会并没有加以阐述。

因此我想进行如下定义。

定义

“姐妹城市是一种对等的地区间合作，它脱离国家间的外交形式，超越人种、宗教、政治意识形态的差异，其目的在于通过市民间的直接接触加深相互理解，加强互敬和友谊的纽带，通过在多领域间进行人和信息等的交流为世界和平做出贡献并促进彼此地区的发展。”

重要的是

超越立场差异进行交流

不是国家而是市民直接接触交流

世界和平与彼此地区的发展

对等的地区间合作。

下面我想探讨一下姐妹城市交流的实际活动。姐妹城市交流主要有四大领域。

其一是青少年交流。这是姐妹城市交流的固定项目，特别是在与英语圈的姐妹城市交流中尤其必不可少。在青少年思维尚未定型时，通过姐妹城市交流让其前往海外，经历各种体验，会对青少年的未来产生很大影响。这不但有助于英语学习，还是重新思考在异国文化中生活是怎样的情况、以及自己本身、自己的城市和自己的国家的重要契机。

但是通过通常的青少年交流活动能够前往海外的学生数量有限，大部分学生是无法参加的。因此除了青少年交流之外，学校间结成姐妹校，设置经常性交流的组织机构也非常重要。如果在学校间、甚至更广阔的学生间进行交流，那么即使能够去对方国家的学生数量有限，学校或班级代表依旧能够将大家的信息传达过去。众多青少年能够共享一个人的体验，这种交流也很重要。

其二是文化交流。姐妹城市交流中通常进行的文化交流有在对方的姐妹城市表演自己的传统艺术，或者是音乐等团体或舞蹈团在当地举行公演。说到文化交流，似乎给人以普通市民很难参与的感觉，其实兴趣爱好也是文化。例如，书法就是在中日间进行交流，而如果是在美国，这还能成为一种表演。我想对园艺有兴趣的人也很多，那么以家庭菜园和园艺为主题进行交流如何？或者也可以考虑以猫、狗等宠物为主题进行交流。文化存在于日常生活之中，找到这些突破口，就能够将远在国外的姐妹城市甚至是那里的居民拉近到身边。

其三是经济交流。经济交流自治体要比市民更加关注。搞活地区经济是世界性课题。如果能通过姐妹城市搞活经济就再好不过了。

许多姐妹城市之间，都曾尝试过是否可以相互在对方城市销售产品，或者是否可以在彼此间开展贸易活动。但是这些尝试基本上都是以失败告终或仅局限在极小规模的范围内。这是因为从访问的姐妹城市买些土特产品还可以，但是如果要进行大规模的贸易，那么仅将贸易对象限制在姐妹城市是不行的。如果要做的话，可以将姐妹城市作为在海外工作的一个窗口或者视为一个合作伙伴。

经济交流的重点是工商会议机构、青年会议机构等当地的经济相关部门访问姐妹城市，由此亲自发现新的趋势，接触新的构思和理念。我们不知道在美国畅销的东西直接引进到日本是否仍能畅销。但是如果时时注意放眼世界，获取新的信息，应该能从姐妹城市那里学到很多东西。

最后是课题解决型交流。在自己的区域感觉困惑难以解决的事情可能会在姐妹城市找到线索。日本当今最大的课题可能就要算少子化和地方人口过疏化了。此外环境问题和商业街的搞活问题也有待解决。找出这些区域为之烦恼的具体问题，将其与对方城市相同立场的人进行意见交换，访问当地并从其应对方法中汲取经验，这就是课题解决型交流。

在冈山市和美国圣何塞市的姐妹城市交流中，曾以家庭暴力（DV）这一严肃主题为主进行过交流。负责DV的工作人员实际访问圣何塞时，参观了当地的NPO的DV设施，他从当地的负责人那里详细了解了情况，并交换了意见。针对DV这类敏感而复杂的问题，能够公开参观这类设施可以说正是得益于姐妹城市这一关系。

虽然以往也曾组织过对姐妹城市的考察，但是课题型交流主要是通过对课题具有充分的问题意识和解决欲望的人之间的交流来加深彼此间的联系的，它充实了姐妹城市交流的内容。

日本用于表彰优秀姐妹城市交流活动的日本总务大臣姐妹自治体交流表彰制度从2006年开始实施。作为其选拔委员，我感觉以往获奖团体具有以下几项特点。

1. 是地区整体的交流

去年受到日本总务大臣表彰的城市有人口2万的北海道当别町。该町与瑞典的莱克桑德镇开展着交流。要说为什么如此小的城镇间的友好合作能受到表彰，其理由可以说正是因为它们是小镇，而小镇的各类人员都参加交流也是其原因。当别町切实组织了许多交流活动，如举办北欧代表性的节日“夏至节”，经济团体和青少年进行互访等。其中已举办了25次的“夏至节”作为姐妹城市交流的见证一直持续至今，成为全国少有的真正得其精髓的节日。瑞典国王访问日本时还特意访问了当别町，这种交流已成为日本与瑞典友好交流的象征。

2. 有助于搞活地区

其次交流还要助于搞活城镇。搞活城镇有间接的和直接的等各种形式。去年荣获日本总务大臣奖的飞驒的高山市与美国丹佛市是于1960年缔结的姐妹城市。它们拥有近50年的交流合作历史，高山市与丹佛之间，互派亲善使团，并在文化、体育、教育、经济等领域进行了广泛的交流。如此长期的与海外的交流使高山市成为国际观光城市，每年接待14万人的外国游客。50年间通过姐妹城市与海外进行交流的经验也为高山市顺利接待外国来客提供了帮助。

3. 引进新思路开展新工作继续促进交流

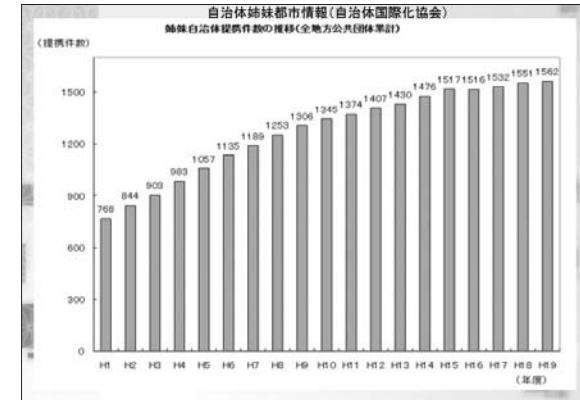
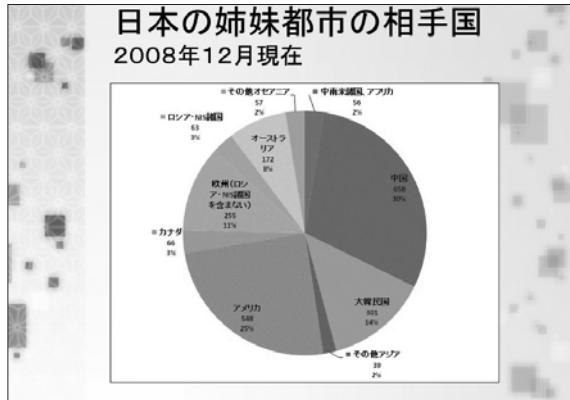
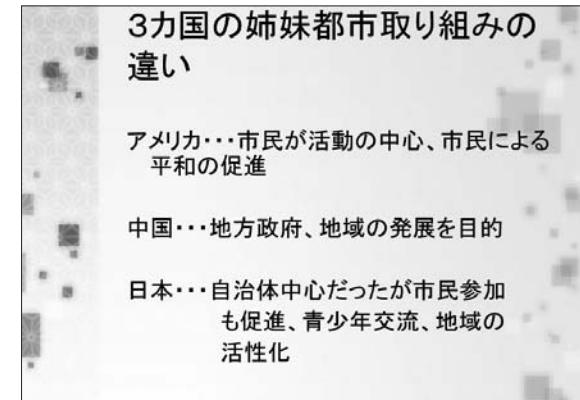
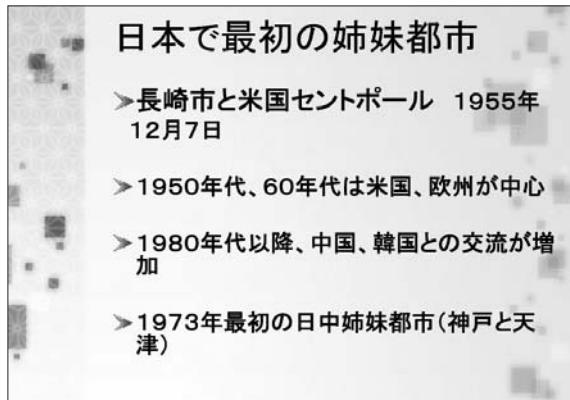
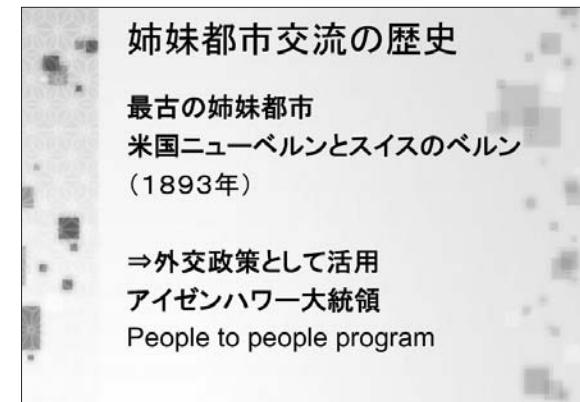
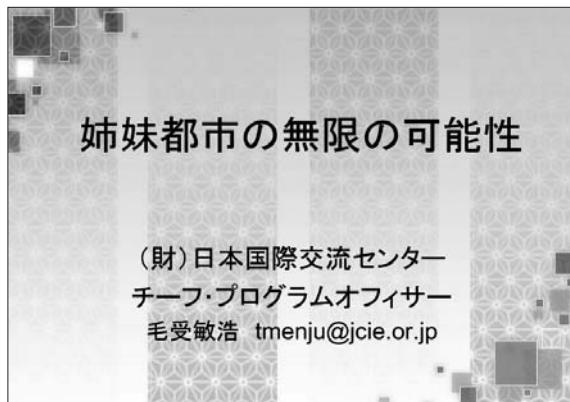
进行姐妹城市交流最重要的就是不要陷入模式化。必须经常引进新思路保证其具有新鲜性。由我牵线缔结的姐妹城市有岩手县花卷市和美国阿肯色州热泉市。两者都是温泉资源丰富的城市。热泉市是据说连艾尔·卡彭（Al Capone，美国纽约著名黑帮老大）都曾前往进行温泉治疗的独特温泉城。

花卷市每年都向热泉市派遣高中生，但最近也开始进行新的尝试，那就以环境问题为主题的交流活动。他们设想举行名为“碳补偿（carbon offset）”的活动。碳补偿是指将我们排放的二氧化碳等温室气体间接地在其他地方进行减少的活动。前往姐妹城市要乘坐飞机，这样就会排放大量的二氧化碳。高中生前往姐妹城市会导致排放多少二氧化碳？鉴于此，姐妹城市的高中生们正在一起开展植树活动以作补偿。如此他们将当今时代所追求的主题和关心的事件巧妙地融入姐妹城市的合作中，从而也搞活了交流自治体本身。

前面曾说过姐妹城市的交流涉及各种领域，但是我认为姐妹城市交流本身不是目的，而是一种工具，是一种有助于实现世界和平和搞活地区的工具。因为它只是工具，所以能否熟练运用这一工具就取决于使用者了。我在前面谈到过姐妹城市交流主要是四个领域的交流，但是如果此类交流实际上无法顺利进行或没有取得成效，这并非姐妹城市交流本身不好，而是从事这一活动的人本身存在问题。

能在何种程度上熟练使用姐妹城市交流这一工具，是关键所在。今天不仅有水户市的负责人，还有来自姐妹城市重庆和阿纳海姆的负责人。我想这是一个极好的机会，各位负责人可以面对面地探讨如何运用姐妹城市交流这一工具。不同的国家和城市对姐妹城市的认识也各不相同，而求同存异，一起探讨如何进行彼此共赢的交流非常重要。同时，不仅是自治体和有限的人来考虑姐妹城市的应有形态，由更多的市民参与思考也是相当重要的。从这一意义上讲，水户市策划此次研讨会可以说意义重大。

姉妹都市の無限の可能性 <基調講演資料>



姉妹都市の無限の可能性 〈基調講演資料〉

そもそも姉妹都市提携とは？

- 国の枠を離れて市民同士が直接触れ合う
- 地域社会の市民同士が相互理解を深め、尊敬と友情の絆を深める
- 多様な分野での交流により、相互の地域の発展と世界平和に貢献する

重要なことは

1. 先入観を持たずに国や立場の違いを越えて交流すること
2. 地域社会の様々なプレーヤー（自治体、市民、NPO、学校、企業など）が交流に参加できる
3. 世界の平和と相互の発展に寄与
4. 対等な立場での交流・協力

姉妹都市交流の主な分野

1. 青少年交流
2. 文化交流
3. 経済交流
4. 課題解決型交流

青少年交流

- ・姉妹都市交流の定番
- ・青少年の時期の異文化体験の大きさ
- ・少数しか参加できない⇒学校提携へ

文化交流

- 地元の伝統芸能を相手都市で披露
- 相手の文化を相互に披露
- 共同で新しい文化を創り出す
⇒ 和太鼓と韓国のサムルノリの共演

経済交流

- お土産レベルではよいが貿易では限界
- ・意義
商工関係者が新しいトレンドや世界の動きを知る
姉妹都市の同業者と交流、悩みや喜びを分かち合う

姉妹都市の無限の可能性 〈基調講演資料〉

課題解決型交流

▶地域社会の課題の解決のヒントを
姉妹都市から学ぶ

例:岡山市—サンノゼ DV施設の視察
横浜市—サンディエゴ 外国人の子どもの教育

成功している姉妹都市とは?

1. 地域ぐるみの交流になっていること

地域社会の多くのプレーヤーが参加

- 北海道当別町(人口2万人)—スウェーデン・レクサンド(2008年姉妹自治体総務大臣表彰)
- ・青少年、経済団体の相互訪問
- ・北欧の祭り、夏至祭の開催
- ・スウェーデンをテーマにした町並みづくり
- ・駅舎、郵便局など
- ・スウェーデンセンター(町民がスウェーデン語を学ぶ)

成功している姉妹都市とは?

2. 地域の活性化に役に立つて いること

高山市…国際観光都市の基礎を姉妹都市
交流が築く(デンバーとのホーム
ステイなど)

札幌市…ミュンヘン・クリスマス市



成功している姉妹都市とは?

3. 新しいアイデアを常に取り入れる

- ・岩手県花巻市—米国ホットスプリング市
⇒高校生派遣で「カーボンオフセット」
- ・群馬県高崎市—5都市と姉妹提携
⇒6都市で地球市民の日、環境交流

姉妹都市交流の近未来

1. ITを使った交流 ⇒教室同士を結び付ける

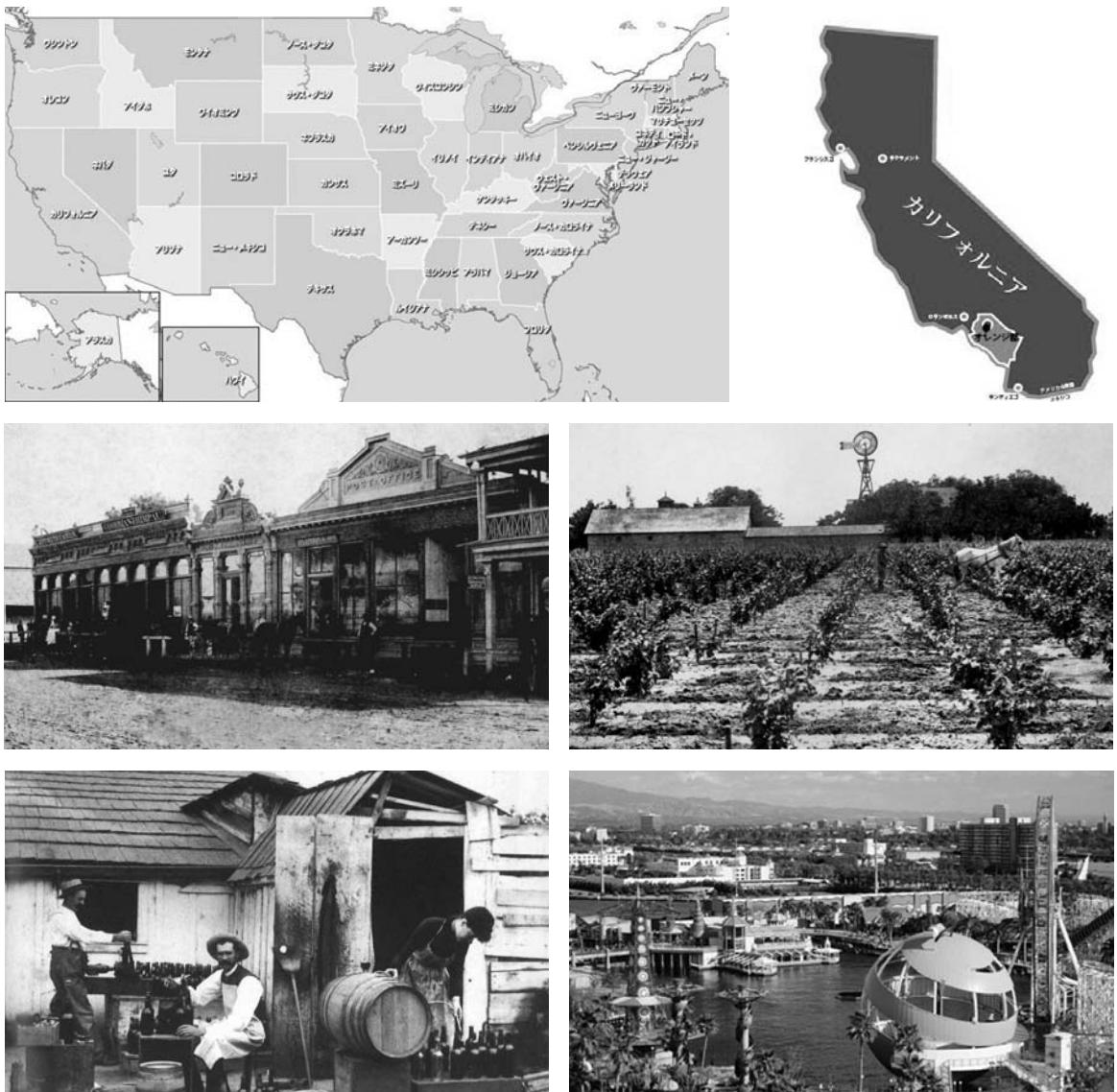
2. 「国際」の壁を破る ⇒身近な趣味をテーマに(ガーデニング、 ペット、オーガニック料理,etc.)

そのためには⇒
相互の都市をよく知り、相手とのコミュニケーションを図ること

都市紹介



都市紹介：アナハイム市



アナハイム市はアメリカ合衆国カリフォルニア州の都市で、ロサンゼルスの南東約45キロに位置しており、カリフォルニア・ビーチで有名なオレンジ郡最大の都市です。

人口は346,823人、州で第10位、全米でも第55位の人口を抱えています。年間を通じて快適な気候に恵まれ、またカジュアルで洗練された文化を持ったひときわユニークな地域です。

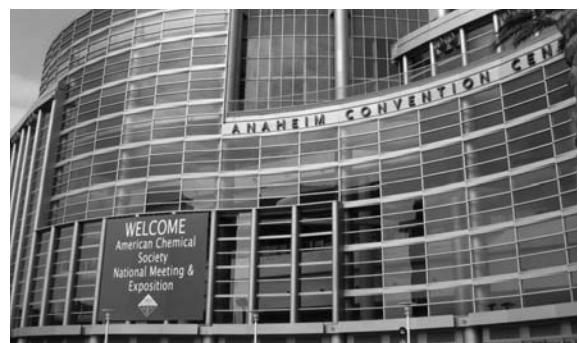
アナハイムは、1857年サンフランシスコから移住してきたドイツ人の集団入植地として創設されました。アナハイムの「ana」は町を流れるサンタアナ川から、「heim」はドイツ語で「家庭」を表す単語で、ドイツからの開拓者たちがこの地を彼らの故郷と考え家を構えたことから名付けられたと言われています。

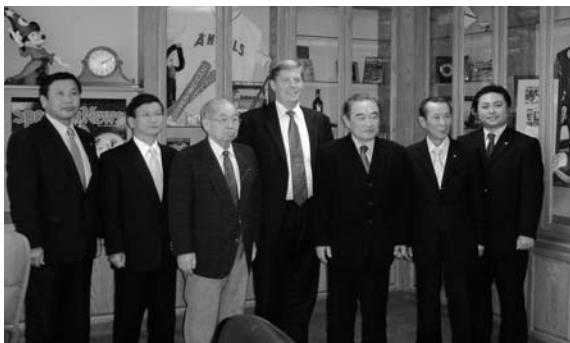
温暖な気候に魅了されたドイツ系住民たちは、この地でブドウ農園を経営し、ワインの生産を始めました。ワイナリーの経営は成功を収めていましたが、1880年代に害虫に

よってブドウ園は壊滅し、残念ながら繁栄していた事業は衰退してしまいました。

1950年代まで農業が街の主要な産業でしたが、世界的に有名なウォルト・ディズニーがディズニーランド施設の建設場所としてアナハイムを選んだことがきっかけとなり、アナハイムは観光業や娯楽産業、電子機器などの工業が盛んな街へと変貌していったのです。

世界でも有数の規模であるコンベンションセンターやコンサートを中心として様々なイベントが催されるグローブ・オブ・アナハイム、メジャーリーグ・ロサンゼルス・エンゼルスの本拠地であるエンゼル・スタジアム・オブ・アナハイムも有名です。





また、アナハイムの中心市街地活性化の目玉として2007年にオープンした「ミュゼオ」は、南カリフォルニアで一番新しい美術館です。

このように素晴らしい個性を持つアナハイム市と水戸市の交流はアナハイム在住の水戸出身の実業家が、恩師をアナハイム市に招待したことを契機として始まりました。

その後いくつかの人的交流が実を結び、アメリカ合衆国建国200年祭にあたる1976年12月にアナハイム市と水戸市は国際親善姉妹都市を締結しました。

それ以来、友好関係を深めるため様々な交流活動を重ねてきました。

特にそれぞれの都市の将来を担う青少年の交流には積極的に取り組んでおり、毎年学生の派遣・受入れを行っています。

学生は、約2週間のホームステイを通じて互いの文化や習慣を学び、言葉の壁を越えて得た友情をその後も大事に育み交流を続けています。

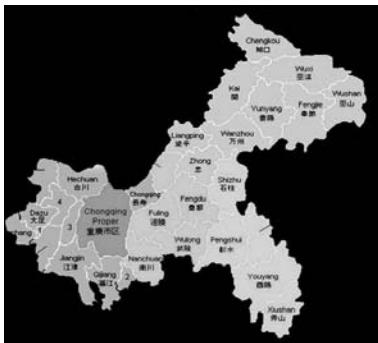
また、近年では2006年に姉妹都市交流30周年を記念し子どもから大人まで楽しめるイベントを行うなど、現在に渡って多くの市民の方に水戸とアナハイムの交流について理解を深めていただけるよう努めています。



【参考資料】

- アナハイム市ホームページ <http://www.anaheim.net/>
- アナハイム/オレンジ郡観光コンベンション振興局ホームページ <http://www.anaheimoc.org/>
- Stephen J. Faessel 「Images of America ANHEIM 1940-2007」
- Stephen J. Faessel 「Images of America EARLY ANHEIM」
- 和田祐之介編著 「アナハイムへの道」
- 水戸市・アナハイム市国際親善姉妹都市締結30周年記念誌 「友情の懸け橋」

都市紹介：重慶市



重慶市は内陸にあり、四川盆地の南東部、長江の上流に古くから栄えた港町です。面積は広大で8万2千400平方キロメートルあり、これは北海道とほぼ同じ大きさです。人口は約3千235万人で上海や北京を上回る中国最大の人口を擁する都市です。

重慶市の気候は亜熱帯性で湿度が高く、雨や霧が絶えず発生し蒸し暑い夏には日中最高気温が40℃を超える日が続きます。こうした気候から「中国の三大ストーブの一つ」とも称されています。

四方を川と山に囲まれ山の斜面に建物が並ぶ地形が作り出す夜景は素晴らしい、また都市の作り出す夜の景色は「夜景を見ないなら重慶に来ていないのと同じ」と言われるほどです。

重慶市は3000年以上の歴史を持ち、水陸交通の要衝としてまた物資の集散地として古くから栄えてきました。

1189年南宋朝時代に慶事が二重にあったことから、その二重の喜びを意味する「重慶」

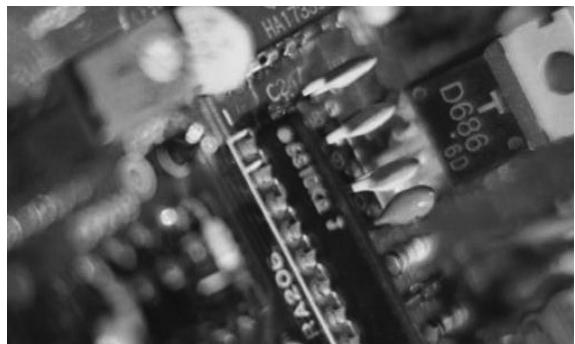
と呼ばれるようになりました。その後中華民国時代に「重慶市」となり、第二次世界大戦中は重慶市に国民党の臨時首都が置かれたこともあります。

1949年中国共産党による統治が開始され1954年に重慶市は四川省に編入されました。

その後1997年に中国政府が直接管理する省と同レベルの都市として、重慶市は中国で4番目の「直轄市」となりました。

重慶市は幅広い分野の産業が活発で中国六代工業拠点の一つとされています。近年では、自動車・オートバイ関連企業や環境技術などの日系企業が進出しています。





また近年急速な発展をしているのがIT産業です。今年5月には約2兆8千億円以上の生産額が見込まれる巨大な産業地帯が形成される予定です。重慶市は世界のIT企業が集まる「中国のシリコンバレー」を目指しています。

産業化が急速に進む一方で水と緑に恵まれた重慶市は、多数の文化財や観光資源も豊かな都市です。その中でも観光スポットとしても有名なのが「三峡」です。6,300kmの長さを持つ川、長江に壮観で世に並ぶ物がないと言われるほどの大峡谷が広がっています。その景色は長江で最も雄壮で美しい山水画廊のようだと言われています。

水戸市と重慶市の交流は1985年に当時の中日友好協会・副会長が水戸を訪問したこと を契機として始まりました。

1993年には水戸市で開催された「全国・都市緑化フェア」において、重慶市人民政府 や重慶自然博物館などの全面的な協力のもと、水戸市は「恐竜館」を出展し多くの入場 者を集め成功を収めました。

その後も活発な人的交流を重ね、2000年6月に友好交流都市提携に調印しました。





2001年には調印一周年を記念して、市民に広く紹介するための「重慶展」を水戸市で開催し、千波公園内には重慶広場が開設されました。

このほか青少年交流にも積極的に取り組んでおり、2002年には北京市で行われた日中友好交流都市・中学生卓球大会に水戸市・重慶市の中学生が合同チームで参加、また翌年には、小学生の絵画や書道作品を展示する「児童書画展覧会」を水戸市国際交流センターで開催するなど様々な交流活動を行っています。

【参考資料】

- 重慶市人民政府ホームページ <http://www.cq.gov.cn/>
- 重慶市書物編集委員会「中国 重慶」
- 重慶市人民政府外事弁公室編「重慶 Chongqing China」
- 李金龍編「長江三峡」（湖北美術出版）

パネルディスカッション

水戸市市制施行120周年記念事業「国際姉妹都市交流シンポジウム」
これからの姉妹都市交流のありかた -市民民主導の交流に向けて-



コーディネーター



毛受 敏浩
財団法人 日本国際交流センター
チーフ・プログラムオフィサー

パネリスト



Lorri Galloway ローリー・ギャロウェイ
アナハイム市議会議員

2004年アナハイム市議員に初当選。虐待された子どもや母親の緊急避難所の創設や、ドメスティック・バイオレンス（家庭内暴力）防止プログラムの設置、普及活動に尽力し、数々の功績を収めている。また、青少年の育成においても強い関心を持っており、水戸市・アナハイム市で毎年行っている学生親善大使の派遣事業については「若いうちに内外に目を向け見聞を広めることは、大事なこと。そうした若者を育てていかなければならない」として、学生交流プログラムを推奨している。



Henri Soucy ヘンリー・スーシー
アナハイム市姉妹都市協会前会長

アメリカのノースロップ社に勤務する傍ら、水戸市学生親善大使の受け入れホストファミリーとして、また、学生親善大使プログラムの責任者として、両市の交流事業の円滑な実施に大きく貢献している。

さらに、アナハイム市姉妹都市協会理事として、同協会の運営方法や事業内容について見直しを図り、より良い組織作りを目指している。



John D. Nguyen ジョン・グエン
アナハイム市姉妹都市協会理事

2002年にアナハイム市学生親善大使として水戸市を訪問。約2週間のホームステイの経験を持つ。高校在学中に青少年の指導者を育成することを目的としたNPO組織「Youth Leadership America (YLA)」を創立など意欲的に活動。大学卒業後は、起業家、金融・投資コンサルタントとして業種・業態問わずコンサルティングを手がけている。また、学生親善大使の経験を活かし、アナハイム市姉妹都市協会理事として姉妹都市交流に積極的に携わっている。



吳 昌徳

重慶市政治協商會議弁公庁副庁長

1992年9月～1996年1月 重慶市政治協商會議研究室副主任を経て主任

1996年1月～2000年9月 重慶市政治協商會議専門委員会第二弁公室主任

2000年10月～2009年3月 重慶市政治協商會議科学教育文化衛生体育委員会副主任

2009年4月～ 現職

中国は数多くの民族・党派が存在する国である。国の重要な施策、あるいは国の経済と人々との生活と関わりのある重要な問題に当たっては、執政党である中国共産党は必ず事前に各民族、各界、各党派及び無党派民主人士と話し合い、繰り返し意見を求め、最終的に決定を下すこととなっている。

政治協商会議は、各民主的党派や人民団体、各民族及び各界の人々が政治に参加し、協力しあう重要な場所となっており、中国で最も高いレベルの協商諮問機関とされている。中国共産党と中国政府はこの機関を通して、重大な問題を協議し、その意見と提言を聞き取る。また、国家の政策方針を協議するほか、国家機関及び各機関の公務員の活動に対して監督を行い、指摘することとなっている。

政治協商会議は、政府機関ではなく、一般の社会団体とも異なり、最も広範な中国人民の愛国統一戦線組織で、中国では「シンクタンク」とも称されている。この組織は、全国委員会及び省、自治区、直轄市、県などの地方委員会が設けられている。



川瀬 由紀子

メサフレンドシップ会長

東京都出身。幼少の頃より外国人は身近な存在で、海外はそれほど遠い世界のことではない環境で育つ。結婚を期に、茨城県日立市に転居。当時活動していた「日立国際友好協会」に入会し、外国人への英語でのテレフォンサービスやアメリカからの訪問団のお世話などを通して、在住者・訪問者と交流。その後、アメリカでの生活を経験し、帰国。これまでの経験を活かし、子育てをしながらでもできる国際交流活動をしたいという想いから、「MESA Friendship」の立ち上げに参加。2007年5月より、会長を務める。

メサフレンドシップは、水戸市を中心として茨城県内で活動を展開している国際交流のボランティアグループ。世界各地から日本に来ている人々との英語によるディスカッションを通じて、互いの価値観や文化の違いを認め合い、また同じ人間として共感出来る部分を理解し合うことを目指している。様々な活動や交流を通じて世界に目を向け、考えを深め、日々成長していくよう互いに刺激し合いながら活動を行っている。

【メサフレンドシップ <http://mesafriendship.web.fc2.com/>】



井上 恵市 水戸コンベンションビューロー事務局長

茨城県出身。1974年に株式会社日本交通公社（現在のJTB）に入社。14年間土浦支店に勤務。その後、群馬県太田市、茨城県日立市、水戸市、埼玉県熊谷市、新潟県長岡市の各支店に勤務。高等学校修学旅行や学生派遣事業等の添乗を通して、中国・韓国・オーストラリア・カナダ・アメリカ等を訪問し、現地研修や生徒間交流の業務に携わる。平成21年4月より（株）JTB関東本社から水戸商工会議所内に設置された水戸コンベンションビューローへ出向。水戸コンベンションビューローは、平成21年5月に水戸商工会議所内に設置。水戸市内により多くのコンベンション（大会、会議、各種イベントなど）を誘致し、関連する観光・商業等の産業やビジネスへの展開を図り、本市への大きな経済波及効果・社会効果を導くことを目的としている。コンベンションの開催により、交流人口を増加させ観光都市・商業都市としての発展を支援し、本市スローガンである「元気都市水戸」の実現を目指している。

【水戸コンベンションビューロー <http://www.mitocb.jp>】



橋本 耐 水戸市副市長

茨城県出身。1989年水戸市入庁。企画課長、下水道部長、市長公室長、水道事業管理者を歴任。日韓共催「2002 FIFAワールドカップ」開催の際、コスタリカ共和国代表チームと水戸ホーリーホックとの親善試合を行うとともに、水戸市国際交流センターと水戸芸術館で「コスタリカ展」を開催。国際交流とW杯の盛り上げに尽力した。また、水道事業管理者であった際には、重慶市との水道分野の技術交流の実現に向けて尽力した。

2008年4月より、水戸市副市長。

パネルディスカッション

毛受

本日は、姉妹都市のアメリカ・アナハイム市と友好交流都市の中国重慶市より、このディスカッションに4名の代表の皆様の参加を頂きました。アナハイム市、重慶市ともに、すばらしい都市であります。今回は、この2都市に主催都市の水戸市を加え、3都市の代表の皆様が集まっておられます。このような機会は、そう度々あることではありません。もちろん、水戸市の皆さんには初めての機会だと思いますし、とてもユニークだと思います。

それではまず、色々な立場で姉妹都市交流に関わっておられるアナハイム市並びに重慶市の代表の方々から、今の海外における姉妹都市交流がどのようなものかをお聞かせ願いまして、その後で日本人の水戸市の代表の方々から、この姉妹都市交流について日頃のお考えをお聞かせ願いたいと思います。

それではまず、呉さんからよろしくお願ひします。

呉



ご在席の皆様、こんにちは。重慶市と水戸市の友好交流都市交流は、今年で9年目になります。これまで、重慶市と水戸市との間では、科学技術、文化など様々な分野で交流を行ってきました。今回、私は重慶市政府を代表して参りました。水戸市が市制を実施して120周年を迎えるにあたって、私たち双方の交流は、非常に良い成果を上げることができたと考えております。私は重慶市政府並びに重慶市民を代表して、心よりお祝い申し上げます。

ここで私は、重慶市のこれまでの経験や体験を通して、私の友好交流都市交流の見方を申し上げたいと思います。

まず第一に、都市の魅力とは、その都市が持つ「個性」によるところが大きいと思います。そういう意味で重慶市は、大変魅力的な都市であると言えます。重慶市は山間地域を持った都市であり、古戦場や長江の三峡があります。それに加えて、重慶市は悠久の文化を持っております。有史にして三千年の歴史があり、「アジアの母」といわれる巫山^{フザン}は二百万年の人類歴史があるといわれております。またこの地は英雄が多く活動した地域でもあり、第二次大戦において、アジア太平洋地域のファシストに対し、反撃を行う基地があった都市でもあります。したがって、世界平和に大きく貢献した都市でもあります。先ほど、皆様にパワーポイントでご覧頂いたように、重慶市は香港より美しい夜景を持つ都市であります。火鍋があるグルメの街でもあ

ります。そして橋梁の数の非常に多い、近代的都市であります。また高速道路の総延長距離は中国の中でも1位2位を争うほどで、それだけでなく水陸空の交通手段がとても発達していて、便利な都市です。第二の特長は、めざましい経済発展です。改革開放政策が推し進められ、重慶市はこの数年で経済成長率12%以上の発展を遂げています。重慶市は世界的な金融危機に対しても、すでに回復軌道に乗り始めております。今年の1月から9月期のGDPは3,800億元です。これは同期前年比13.4%増となります。中央政府が重慶市の内陸部に保税区の設置を許可した結果、重慶市には、世界の500企業の事業所が立地しています。また水戸市を含む世界の21都市が重慶市と友好交流都市提携をしています。また重慶市には内陸開放工業団地が建設中です。今年の第4四半期は、経済成長のスピードがさらに増すと予測されています。

第三に、都市の究極の目標は、人々と自然との「共生共生」にあると思います。重慶市は青い空、きれいな水など、一貫して環境に配慮しながら都市開発を行ってきました。この努力は、めざましい成果を上げております。重慶市は、昔の英国ロンドンと同じく「霧の都」とも言わされてきました。しかし、昨年は、1年間で霧のない日が290日ありました。これも、私たちが環境改善に尽力してきた結果だと考えております。現在、我々が目指すまちづくりは、交通がスムーズでありながら緑も多く、市民が健康に暮らすことのできる平和で住みやすい都市であります。私たち重慶市民一人一人の努力によって、環境のすばらしさを享受し、発展の成果や満足できる生活をともにシェアすることができると考えています。

第四に、友好都市交流について申し上げます。友好都市間の交流について、その内容は幅広く、その形式は多様性があって良いと思います。友好都市との交流の目的は一つで、相互に利益がある「互恵求観念」ということです。交流の内容は、経済分野、文化分野、社会分野など多岐にわたり、形式は市政府ルート、民間ルート、団体ルート（学校、文化娯楽団体、スポーツ活動団体、労働組合など）などが考えられると思います。

毛受

では次に、アナハイム市のローリー・ギャロウェイさん、よろしくお願ひします。

ギャロウェイ

ありがとうございます。今日ここに出席できたことを、大変光栄に思っております。改めてお礼申し上げます。

アナハイム市と水戸市は32年間に渡り、姉妹都市としての関係を享受して参りました。私は3年前



にも水戸市を訪問いたしましたが、実はその際に水戸市とアナハイム市の関係がどんなものなのかについての理解を深めることができたと同時に、もっと理解を深めることも可能だと気付かされました。これまでの姉妹都市交流を振り返ってみると、地方自治体としてのアナハイム市のサポートがこの姉妹都市交流活動にはあまり提供されておらず、むしろ中心になって活動してきたのは民間であり市民だということあります。しかし、現在は、私を含め、アナハイム市長や市議会、行政の現場が民間との関係を深め、パートナーシップを發揮し、強化できるようになります。そして、それによって成功例もたくさん出てくると思います。

これまで、アナハイム市と水戸市とが傾注してきた活動は、学生の交流プログラムや文化分野だけに限られており、他の未着手の分野にたくさんのチャンスが残されています。私はこの数年の間、市長を初め市議会や市民有志の皆様と協力して、新しい委員会の立ち上げに尽力して参りました。それ



が「姉妹都市委員会」です。この委員会を設置することによって、本当の意味でアナハイム市行政と市民とが協働体制を図り、より効果的な関係が構築できるもの信じて、努力を重ねて参りました。もちろん、一番大事なことは市民が心を合わせることだということを忘れてはいる訳ではありません。

アナハイム市と水戸市とには共通する問題がたくさんあります。私たち一人一人にとって、何といっても最重要であるものの1つは家族の安全、つまり治安ということだと思います。アナハイム市は、治安や家族の安全について、非常に重視しています。そしてこの信念に基づき、私たちは「アナハイム家族のための司法センター」というモデルプログラムを立ち上げました。これまでとは全く違う新しい形で、家庭内暴力、DVの犠牲者や家庭内暴力の被害者に対して、手を差し延べることができるもの信じています。そしてこの分野で、新たに水戸市民の皆様と協力することができるのではないかと考えています。相互に協力関係を構築することにより、治安や家族の安全を高め、さらには生活の質の向上を図ることができるもの信じています。

皆さん、アナハイム市といえば、世界的に有名なディズニーランドやアナハイム・エンジェルス（野球）、アナハイム・ダックス（アイスホッケー）、ホンダセンター（屋内競技場）などエンターテイメント満載であることはご存じかと思います。しかし重要なことは、これらの特性をいかに皆さんと共有していくか、そして真のコラボレーションを創り上げができるか、ということではないかと考えます。例えば、アナハイム市には、コンベンシ

ヨンビューロー（観光コンベンション振興局）があり、そこでビジネスやマーケティングについて精力的に研究しております。その結果、アナハイム市には世界中からたくさんの方たちが訪れます。この経験を生かし、どうやつたら私たちの姉妹都市関係をさらに実り多く、効果的なものにしていけるか、それを一緒に見ていくことが重要ではないかと思います。この熱い思いで、私たちの関係をより良く構築し、改善強化していきたいと思います。また、この思いの結実が「アナハイム姉妹都市委員会」の設立あります。今回設立された新たな委員会は、様々な分野の15名の市民が委員として参加します。委員会では、どうしたら関係改善ができ、より良いプログラムにして行くことができるのかについて協議します。これは、相互理解を深めさらなる協力を可能にするために有効なものであると信じております。

この辺で、私のお話を終らせて頂き、他の皆様のお話を伺いたいと思います。

スーシー

からは、この32年間、私たちの姉妹都市活動の要となってきた、学生の交流プログラムについてお話ししたいと思います。1988年（昭和63年）以降、アナハイム市は水戸市の学生380名を学生親善大使として受け入れて参りました。特にこの3年間は、私自身がプログラムの企画、運営に直接関わって参り、家族に「いつもあなたは学生のことを気づかっているね」と笑われて参りました。しかし私にとって、水戸の学生は、本当の娘や息子と代わりありません。学生のプログラムは、様々なアメリカの文化を体験してもらえるようバランス良く作っています。日本のような厳しい教育環境とは違って、雰囲気的には非常にリラックスしたものになっています。例えば、アメリカの歴史や価値観について学習する一方、ディズニーランドやユニバーサルスタジオに行ったり、アナハイム・エンジェルスのプレーを楽しんだり、ビーチパーティーをしたりと楽しむような要素も盛り込み、バランスを取るようにしています。特に、3年前からは、学生の交流活動の記録を収めたDVDを2週間かけて制作し、これを学生親善大使に記念品として進呈しています。

先日、そのDVDをご覧になったある親善大使のお母様が「あのDVDを見ていると、私も息子と一緒にアナハイムへ行ったみたいでした」とおっしゃって下さいました。私たちが制作したDVDがこんなにインパクトを与えるとは、本当に作って良かったなと思いました。

そしてこの1年間で、新たな取り組みも始めています。その1つは、「ペンパル」という文通システムです。この企画のおかげで、幼稚園の小さな子どもたちにも、私たちの姉妹都市活動に参加してもらえるようになりました。

もう一つの取り組みは、水戸市にとって特に重要なのが、アナハイム市から、英語教師（AET）を1年間、水戸市へ派遣する企画です。私はこの1年間、水戸市に良い人材を派遣できるよう尽力して参りました。私

からは以上です。

毛受

続いて、グエンさんお願ひします。

グエン

私は、私自身が学生親善大使の1人であったことから、自分は非常に良い実例を体現しているのではないかと思います。姉妹都市活動の中で、この学生交流プログラムが最も重要なのは、一度だけの訪問、1回きりの観光に終わらず、その体験をもとに、継続的に関係を拡充していくことがあると思います。私は2002年（平成14年）、初めて水戸にきました。そして今回が3度目の訪問になります。私は現在、会社を経営しておりますので、今回は事業者として、また大学の卒業生として、ここに参加しております。大学卒業以降も継続的にプログラムに参画しておりますし、今でも姉妹都市活動に投資、再投資を重ねております。私は継続することが、この活動にとって最も重要なのではないかと考えています。

毛受

海外の4名の方からお話を伺いました。最初の呉昌徳さんから、重慶市は中国の大きな都市でありますが、友好都市の交流については、経済、文化、社会と多方面の交流があって良い、交流の担い手も、政府、市民、団体と多様な形があって良い、重要なのは互恵求的交流でなければならないというお話をありました。

アナハイム市の3名の方のうちギャロウェイさんからは、アナハイム市役所が姉妹都市について新しい条例を作り、姉妹都市交流がこれまで民間任せであったものを行政と市民とが協働で行おうという、新しい動きが始まったというお話がありました。スーシーさんからは、これまでアナハイム市と水戸市の交流活動中心であった学生交流について、具体的なお話がありました。また、グエンさんからは、学生親善大使の経験者という立場からお話しして頂きました。次に日本側から、お話を頂きます。まず橋本さんからお願ひします。

橋本

水戸市の橋本耐でございます。私は行政の立場として、お話をさせて頂きます。水戸市は1976年（昭和51年）にアナハイム市と国際親善都市関係を、そして2000年（平成12年）に中国重慶市と国際友好交流都市関係を締結しております。アナハイム市とはすでに、姉妹都市交流を始めて30余年を重ねております。また重慶市とは今年で9年となります。これま



で、多くの市民の皆様が相互の都市を訪れ、様々な交流が生まれております。特にアナハイム市との交流には、学生親善大使という事業があります。この事業は学生親善大使に選ばれた水戸市・アナハイム市の学生が、毎年夏休みを利用して、相互の都市を訪れ一般の家庭にホームステイをしながら、相互の国の文化、歴史を直に学び、異文化を体験するものです。長年継続しており、将来を担う若い世代に、こうした事業を通して国際感覚を養ってもらう機会を提供できたことは、水戸市にとっても、姉妹都市交流に取り組んできた大きな成果と考えています。もちろん、こうした交流は行政だけではできません。多くの市民の皆様、様々な団体からご協力を頂いて初めて、可能になるものだと考えております。組織 対 組織では必ずしも成し得ない、やはり人と人との信頼関係が大切だと思います。そういう意味で、多くの市民の方々に支えられながら、これまでやってきたことについて、この場をお借りして感謝申し上げます。これまで進めてきた様々な相互の訪問という形の中で、国際親善、相互の信頼関係の構築という当初の目標は、いくばくかは達成できたと考えております。今後、このような友好関係を基礎として、どのように交流を拡げて行くかが重要であると考えております。

毛受

ありがとうございました。続きまして、井上恵市さんお願いします。

井上

皆様、こんにちは。私は水戸コンベンションビューローの井上恵市と申します。水戸コンベンションビューローというのは、お手元に資料をお配りいたしましたが、水戸市と水戸商工会議所から支援を頂きまして、今年の5月に設立いたしました。事務所は産業会館に設置させて頂きました。主な業務は、水戸市に色々なコンベンションを誘致して、できるだけ経済効果を図ることであります。先ほど、アナハイムの方からお話をありましたように、今年アナハイム市で歯科医療技術展が開催されました。出展企業数685社、来場者数25,000名という大規模なコンベンションです。水戸市コンベンションビューローは、当初は国内中心に誘致活動を行いますが、将来は海外も含めたコンベンション誘致活動を展開していきたいと考えています。

私は、茨城県土浦市の住民でございます。今は毎日水戸へ通勤しておりますが、それ以前は旅行代理店会社に勤務しております、全国各地を転勤で転々として参りましたが、その中でいくつか国際交流活動の参考になると思われる事例を申し上げたいと思います。

私は水戸に来る前には、新潟県の長岡市が勤務地でした。実は長岡市は連合艦隊司令長官、山本五十六の生誕の地であります。山本五十六は、茨城県にも縁があると聞いております。ともかく、太平洋戦争の暗い歴史はありますが、長岡市と市民有志が山本五十六の慰靈と顕彰と国際親善のために、ハワイのホノルルのパールハーバーで、長岡の技術である有名な花火を打ち上

げようという計画が、私どもの長岡の事務所に持ち込まれ、お手伝いさせて頂きました。今年の3月に「ホノルル・フェスティバル」というイベントが、日本だけでなく中国、韓国、オーストラリア、ニュージーランドの国々が参加して行なわれ、各参加国の文化やスポーツなどの色々な分野の人たちが日頃の成果を披露し、各国の人々との交流が図られました。この一大イベントに、私どもの会社は新潟空港よりチャーター機を飛ばして、新潟市と長岡市の市民100名程の人たちが参加するお手伝いができました。いよいよ来年は本番で、長岡の花火をホノルルで打ち上げる計画をされているそうです。長岡ではこういうお手伝いをさせて頂きましたが、水戸市でもこのような事業ができればと考えています。



水戸市では毎年8月に、水戸黄門まつりが開催されます。この水戸黄門まつりに、アナハイム市民の皆様、重慶市民の皆様に水戸へお越し頂き、フェスティバルに参加して頂けないものかと考えています。またアナハイム市と重慶市の両市に、水戸黄門まつりのようなフェスティバルがあれば、水戸市民の皆様に両市を訪問して頂きフェスティバルに参加して、水戸の文化などをPRし、親善交流できれば姉妹都市交流活動として非常に有効ではないかと考えています。

もう一つの事例は、教育に関するものです。私はこれまで、高校生の海外修学旅行や留学生の海外派遣事業のお手伝いをさせて頂いて参りました。茨城県は10年前より海外への高校生の修学旅行が解禁されました。私どもは姉妹校の橋渡しや現地での折衝のお手伝いをしたり、茨城の生徒を海外に紹介したりというような仕事をさせて頂いておりました。茨城県下の高校生に毎年オーストラリア・ケアンズ市に400名程を旅行して頂く、また中国南京に修学旅行生を案内し、生徒同士の交流が行なわれるお手伝いをさせて頂いてきました。これらの経験を通して言えることは、若い生徒たちは非常に積極的で、旅行前からEメールのやり取りをしてコミュニケーションし、旅行中現地ではスポーツや学校の授業に参加してコミュニケーションし、帰国後はまたEメールのやり取りでコミュニケーションを取るというように、非常に交流の効果が現われていると思います。何よりも若い生徒たちは、国が異なるとこんなに生活が違うということを現地で直に体験し、感じることこそ海外修学旅行の大きな成果だと考えます。笑い話のようですが、オーストラリアの女生徒から「日本の女生徒のスカート丈は、なぜこんなに短いのですか」という質問を受けて、答えに窮しましたが、これもオーストラリアに行って

交流して初めて体験できるのではないかと思います。

最後に、アナハイム市、重慶市の皆様に伺いたいのですが、一つは日本文化を表現できるようなフェスティバルがあるかということ、もう一つは高校生の海外修学旅行の受け入れ態勢があるかという2点をお伺いいたします。

毛受

最後になりましたが、川瀬由紀子さんお願ひします。

川瀬

私は長年、国際交流活動をして参りました。団体としての姉妹都市交流活動との関わりは少ないのですが、使節団のお世話やホームステイを受け入れたことはあります。また最近では学生親善大使の選考委員を務めております。学生親善大使を拝見したり、本日の青少年の交流活動のお話を拝聴しまして、その交流活動がどれほどすばらしいものかを確信しております。今日ご出席のグエンさんが象徴しているように、若い方が若い時に海外経験をして、異文化に触れることが、どれほど若い方の将来に影響を持つものなのかということを感じました。毛受さんのお話にもありましたように、たった1人の経験ではなく、クラスとか学校全体とかに拡げて頂きたいと思います。現状ではそのあたりが少し不足しているように思います。その中で、若い学生さんが1人で頑張っても、学校に1人か2人の学生が頑張っても、恥ずかしいということもあって、自分の経験をみんなに拡げていくことは、なかなか難しいと思います。そんな時には、やはり先生方の指導というものがとても大事だと思います。先生のコミュニケーション能力など、先生方にもその類の研修をぜひ受けて頂きたいと思います。

私が、今日ここにおりますのは、国際交流団体活動をやってきたというだけではなく、一市民としての眼から、姉妹都市交流活動をどう見るかということでもあると思います。姉妹都市について、私の周辺の皆様に伺ったところ、アナハイム市と重慶市とが姉妹都市であることは知っているけれども、はたしてどんな活動をしているのかについては分からぬ、という意見が多く出ていました。学生の派遣のことは皆様よくご存知でしたが、それ以外のことについては、印象としては一部の方が、それも公の方が多く、同じ方が何度も行き来をしているようなイメージがどうしてもあります。もちろん視察団の団員の方が一般公募されていることは存じておりますが、どうしても特別なもののように感じてしまうというのが、私の周辺の皆様の意見でした。今、伺っても、折角とても良い受け入れがあるのにもっと拡げられないのか、皆様に関心を持って頂くには、視察団について他の工夫が必要なのではないかと思います。その方法として、私たちのメサフレンドシップのような小さな団体や国際交流に関心のある団体が、きっとアナハイム市にもあるのではないか。また介護のことを一所懸命考えているグループとか、環境のことを考えているグループなどが、それぞれの都市にあるのではないかと思うので



す。そういう小さなグループでも良いから、そのグループとグループを繋ぐという形を取り入れて頂いたら良いのではないかと思います。視察団ではなく、もっと個々の団体と団体を繋ぐ形、水戸市にはここ国際交流センターのような良い場所があります。インターネット

の環境も整っております。「スカイプ」という動画通信無料のシステムを利用すれば、今日からでもアナハイムの皆様と映像を見ながら意見交換ができる、時代は進んでいます。現地を訪れることが、何よりも国際理解に役立つことは分かりきっておりますが、やはり経済的にも時間的にも非常に制限があります。インターネットを利用することによって、明日にでも、水戸市国際交流センターのような良い場所を使って点と点の交流ができるのではないかと思います。

毛受

ありがとうございました。川瀬さんからは評価もそうですし、具体的な課題提案を含めてお話をして頂きました。段々話が盛り上がってきたように思います。

今、川瀬さんから指摘頂きました、市民に開かれた姉妹都市交流の方法でたくさんの市民が参加するようになることは、特に水戸市の場合、非常に重要なテーマだと思います。井上さんからも、経験を基にして、それぞれの姉妹都市に祭りやフェスティバルがあれば、たくさんの人々を連れて行きたいという、非常に前向きなお話がありました。

この水戸市からの提案について、アナハイム市並びに重慶市の方で、何かお考えがあれば、お聞かせ下さい。アナハイム市の方で、今の水戸市側の提案についていかがですか。

ギャロウェイ

非常に良いところでお話を振って頂きました。実はアナハイム市では、来年、国際バレエ・フェスティバルを開催します。これは、世界中の有名なバレエ・ダンサーが一堂に会するイベントであります。この機会に水戸の皆さんに新しい提案をしたいと思います。水戸市の5人のバレエ・ダンサーに、アナハイム市より特別奨学金を提供したいと思います。つまり、この5人の方々は世界に冠たる一流のバレエ・ダンサーと一緒に、この国際バレエ・フェスティバルにおいて、同じ舞台に登り一緒にバレエを踊ることができるのです。これこそ、まさに水戸市とアナハイム市の真のパートナーシップを表現することだと思います。このイベントは、本当に凄いものだと思います。特にバレエ・ダンサーにとっては、またと無い絶好のチャンスになると思います。

ます。何しろ世界中の有名なバレエ・ダンサーと一緒に、同じ舞台で踊れるのですから。ここにアナハイムバレエ団からの文書を持ってきております。私自身、胸躍る思いでこのイベントに期待しております。

毛受

重慶市の方から、イベントなど、何か提案はございますか。

呉

今ここに具体的なプログラムを持っておりませんので、帰国しましてから、また提案させて頂きます。しかし、今お話できることが5つあります。

一番目は、美術、書道の文化展の交流ができます。

二番目は、青少年の雑伎、少数民族の文化及び少数民族のスポーツ、こういう面で私たち重慶市は特色を待っています。

三番目は教育のことですが、中国の子どもたちは小学生から高校生まで、宿題を含め学業の負担がとても重くなっています。そこで水戸市の学習のさせ方について学ぶことを希望します。

四番目は、観光についてです。重慶市には多くの名勝、景勝地があります。それなどはみな独特で特色のあるものです。鍾乳洞や大足仏像など、これらの観光、見学、視察をして頂きたく希望します。

五番目は経済についてです。中国中央政府は重慶市に対して、非常に大きな優遇策を与えています。税率は全国的には25%ですが、重慶市は15%です。重慶市への投資の良いチャンスですので、ぜひ皆様に投資をお願いします。以上です。ありがとうございました。

毛受

これまでお話を伺いました、それぞれ大切な提案がありました。この辺で市民の皆様の質問、意見に移りたいと思います。皆様、熱心にメモを取られているのを見ても、姉妹都市また国際交流に非常に熱心な方がたくさん参加されている印象を持っております。よろしくお願ひします。

日本人男性

水戸市とアナハイム市と重慶市はそれぞれ、日本語、英語、中国語と言語を異にしております。したがって、各言語が話せないと相互理解のためには、通訳者とか翻訳者が必要となります。これをスムーズに相互理解する方法が無いものかと考えるので。この言語の相違が相互理解の最も大きなネックです。毛受先生から、姉妹都市の主な交流活動として、青少年交流、文化交流、経済交流、課題解決型交流があるとのお話がありましたが、これについても、みな言語の相違がやはり大きなネックになっています。この言語の垣根を取り払い、心と心が通い合う交流ができればすばらしいと思います。何かそのような方法は無いものでしょうか。

中国人女性

私は四川省の出身です。第一部でも毛受先生の話を伺い、国際交流という

のは英語を話してパーティーに出るとか、料理を作り合うという身近なところから始まるのだと思いました。

私は16年前に来日しました。初めは日本語が話せなくて、とても大変でした。私は料理を通して身近な人たちと交流を始め、16年経った今はたくさんの友達ができました。今はとても幸せです。年に1度は四川省に帰りますが、帰るたびに中国はびっくりするほど変化しています。私は日本において、四川省重慶市に投資をしています。年々発展する重慶市は日本人の皆さんにもチャンスがあります。ともかく一度重慶市に行ってきて下さい。

重慶市の国際交流は、政府レベルで充分でないところもあると思います。ですから私は個人レベルで、重慶の国際交流を応援しています。先月上野の美術館において、重慶市の有名な画家20余名と日本の画家との合同の作品展が10月8日から10日間開催されました。私は茨城の画家を紹介しました。また、重慶のテレビで料理番組を持っているバク・チェンさんを今年の8月に水戸に招き、私の料理教室で講師をしてもらいました。

また、私が自分で体験したのですが、日本の皆様もご希望があれば、中国の重慶に株式会社を設立することが簡単にできます。

日本人女性

水戸市から380名の留学生を受け入れて下さっているヘンリー・スーシーさんは、いつも学生がどんな風にしたらアナハイムの良いところを見て来られるか、楽しめるかと心を碎いて下さっているというお話を伺って、本当に温かいなと感じました。「世界は一つ」ということが前から言われておりますが、スーシーさんのようなお気持ちを持っている方がたくさんいらっしゃるとしたら、世界が一つになるのもそう遠いことではないなあと、心がほのぼのとした思いです。

日本人男性

私は、行政書士をやっています。私は、日常的に外国人とのコミュニケーションについて回る入国管理業務に携わっております。日本に在留するに必要なビザや在留許可申請の手続きを行っております。行政に携わる方に質問したいのですが、実際に姉妹都市交流で学生やその他の人たちが日本に来る時に、イミグレーション（入国手続き）関係で苦労したというような事例があれば、1つ2つお教え頂ければと思います。

日本人男性

私は重慶に2度、アナハイムに1度、水戸市の訪問団で行って参りました。数日間の訪問であったのですが、非常に楽しい、貴重な充実した豊かな経験をしました。グループ同士が帰国の時に、別れられないような友情に結ばれて、解散する時これが本物の姉妹都市の友情、姉妹都市の交流なのだろうかと感じました。本物の国際交流とは何だろうと考えます。私もホームステイしたり、受け入れたりと色々な交流の経験がありますが、別れてしまうと、

文通などの交流はありますが、それも時間とともに段々少なくなってしまいます。これが実際に体験した私の実感です。残るのは思い出だけでしょうか。毛受先生のお話にも姉妹都市のあるべき姿についていくつかご披露されておりましたが、具体的に私たちの水戸市と重慶市、アナハイム市との交流の原点とは何だろうかと考えてしまいました。

中国人女性

私は四川省から来た中国人です。私は姉妹都市という言葉は日本に来て初めて知りました。以前にメサフレンドシップの皆さんと姉妹都市の話をしたことがありました。姉妹都市を結ばなくとも、今は国際交流はいつでもできるのだから、本当に姉妹都市が必要なのだろうか、ということが話題になりました。今、姉妹都市らしい交流が未だにできていないのではないかと思います。姉妹都市でなくても、普通に都市間の交流や学生の交流などはできますから、もっと他の文化交流やもっと近い感じの交流ができないだろうかと思います。重慶市という都市は文化が非常にすばらしい都市だと思います。しかし、水戸にいても重慶の匂いがしない、姉妹都市の感じがしない。アナハイム市との交流も学生間の交流だけに終っている気がします。コミュニケーションができるまでに何かすることがあるのではないかでしょうか。



毛受

この辺で会場の皆様からのご意見ご質問を終わりまして、パネリストの皆様から質問に答えて頂くか、またはコメントしたいことがあればお聞かせください。まずは、グエンさんから順にお願いします。

グエン

先ほど、インターネットを使ったコミュニケーションも良いのではないかという意見がありましたが、私はやはり「顔と顔を突き合せる交流（対面の交流）」が重要だと思います。インターネット技術を使った交流というのは、対面の交流を補足するものでしかないと考えています。今のようなグローバル化された時代だからこそ、顔と顔を突き合せる姉妹都市交流が今までより一層重要性を増してきているのだと考えます。一度対面の交流をして初めて、私たちは何者なのか、何をしようとしているのかということを理解することができるのであり、対面の交流すなわち自分の身を持っての交流に優る交流はないと思います。また、今はプロセスの途中です、長い時間のかかるものの一つの過程です。一晩にしてできるものではないということを忘れてはな

らないと思います。私自身、学生親善大使であったと前にも申し上げましたが、このようなプログラムに自分の時間と労力を捧げることは、何度も何度も努力してやってきたのです。

この姉妹都市交流活動は一般市民の皆様が、実際に参加できるまたと無いチャンスということだけでも充分に意義はあるものと考えております。では水戸市がどのように姉妹都市交流活動を続けていくのか、じゃあ「提案は?」と問われると言葉に窮してしまうのですが、やはり市民が参画するということが非常に重要ではないかと思います。例えば、先ほどのアナハイム市姉妹都市委員会の話ですが、この委員会は市民がメンバーとなっている組織です。市民が心を碎いて、アナハイム市行政とともにやって行こうと立ち上げたのです。このように行行政だけではなしに、行政と市民が合意の元に、関係を構築・強化していくことが重要であり、行政だけでは、やはり足りないと思います。実際の交流ということになると様々なレベルで起こり得ると思いますが、やはり入りやすいのは学生レベルの交流ではないかと思います。学生の交流だけに目が行きがちですが、その学生だけでなく、両親、兄弟、親戚、友達へと交流は繋がっていくものですから、非常にダイナミックな拡がりと成り得ますので、最初の足掛りとしては良いのではないでしょうか。次に考えられるのが、経済交流ということになりますが、これについては、例えば行政同士が話し合うことになります。

交流は、様々なレベルで可能ですから、特に制約はないと思います。我々は完璧で理想的な世界に住んでいるわけではないので、一度に色々なことはできませんが、いずれにせよ、どこかで始めて行かなければならぬと思います。

毛受

続いて、スーシーさんお願いします。

スーシー

私は学生の交流プログラムに、相互の関係を深める意味で一言申し上げます。これまで、3年間で45名の留学生の受け入れに携わって参りました、非常に良い形で回を重ねられたのではないかと思います。確かにコミュニケーションの方法については、日米で相違があると思います。アメリカ下さいわゆる「インスタント社会」ですから、何でもEメールに頼っています。これに対して、日本の方は生き生きとしたコミュニケーションも進んでおり、Eメールをアメリカほど多用せず、月に1、2回は手紙のやり取りもされているようです。しかし、日米相互を理解するという点において、学生の交流



というのは非常に意義があると思います。

親善大使とホストファミリーとの関係というのは、その交流が非常に長い間続くものようです。例えば水戸の学生親善大使として、アナハイムで過ごしたあと、もう一度アメリカの大学で教育を受けたいと戻って来



る学生もいれば、ある学生は自分の結婚式にホストファミリーの方を日本に招待しました。また、ある学生はホストファミリーに不幸があった際、わざわざ飛行機で駆けつけました。先ほど料理の話がでましたが、2週間のプログラムの中で、親善大使が得意の日本料理の腕を振るって、ホストファミリーをもてなすというようなことも行っております。それ以外にもアナハイムと水戸の間で一度きりでなく、長く続いている例として、2007年に参加された2名の親善大使のお話をしたいと思います。このお2人に私は、「いつでもアメリカへ戻って来ても良いからね」と申し上げていたのですが、実際に2人の学生はアナハイムに戻ってきて、11月22日から12月1日までの10日間、アメリカのサンクスギビング（感謝祭）を充分に満喫して帰りました。この例がありますように、プログラムを通して互いに持続ある交流を続けていくことは可能ですし、またプログラムを超えた交流をすることも可能であると思います。今後もこの学生交流プログラムの活動を続けて参りたいと考えております。

ギャロウェイ

先ほど、若い四川省出身の女性の方の疑問は、私としては個人的に重要な点を突いていると考えますので、そのことについて答えたいと思います。

姉妹都市制度がどんな重要な意味を持つものか、日本でも、中国でもよく分からぬという話でした。

この地ではどうしてそんな暮らし方をするの、どうしてそんな服を着るの、どうしてそんなに綺麗なの、どうしてそんな風に笑うの、など相互がみんなの全てを知りたいと思っているのです。この姉妹都市制度の重要なところは相手を知れば知るほど世界は小さくなり、一方自分の心は大きくなるということにあると思うのです。

橋本

水戸市といたしましては親善のための環境を作つて行くことが、今後の役割になって行くと考えております。姉妹都市の市民と市民を繋ぐ仕事を直接受け持つ国際交流協会の役割は、ますます大きくなっていくものと思います。行政といたしましても、国際交流協会の活動を積極的に支援していきたいと

思います。このような中で、市民と行政が協力し合いながら、様々な課題に向けて取組んで行くことができれば、人が人と交流し、活力にあふれた水戸市のまちづくりに資するのではないかと期待しています。今後とも、行政一丸となって取組んで参りたいと思いますので、今日ご出席の皆様のご指導・ご鞭撻、よろしくお願ひ申し上げます。

先ほど、中国四川省出身の若い女性の方の話の中に、国際交流は必ずしも、姉妹都市でなくても良いのではないかというご意見がございましたが、姉妹都市親善交流はあくまで「目的」ではなく「手段」だということです。交流は学生であれ、経済であれ、なんであれ、交流ができる、相互が異文化を共有し合いながら尊重し合えば、最終的にはこの交流が世界の平和と相互の発展に繋がる、これが姉妹都市親善交流の本当の目的になるのだと考えております。

井上

私は国際交流の共通事項、つまりスポーツとか、料理とか、文化とか、そういうところから交流を進めると早いのかなという感じはします。それから入国関係で質問があったと思いますが、私も一番頭の痛いところでした。私はこれまで受け入れ業務ではなく、派遣業務を経験して参りました。学生を送り出すにあたって、日本のパスポートでないパスポートを持つ学生と一緒に日本から出国して海外で交流することになると、繁雑な手続きが必要になります。また、パスポートの有効期間が国によって違います。この残存有効期間により、国によっては入国許可が下りたり、下りなかったりということがあるので、非常に神経を使いました。受け入れに関することはあまり分からぬのですが、この辺についても、姉妹都市であれば、今少しスムーズに行く方法があれば良いと思います。

新しい情報が一つあります。茨城空港が来年3月に開港します。茨城空港から韓国の仁川空港^{インチョン}経由で、ロサンゼルスまで、アクセスが良くなります。例えば、茨城空港を13時にアシアナ航空で出発しますと、仁川経由で、その日の15時20分（現地時間）にはロサンゼルスに着きます。非常に行きやすくなると思います。帰りもロサンゼルスから仁川で乗り換え、次の日の12時には帰ってこられます。重慶市については、北京経由など成田からの直行便しかないと思います。将来、乗り換えで良いアクセスができるのではないかと考えています。

最後に、コンベンションビューローのことなのですが、ぜひ、催し物や展示会、会議などがあればご支援できると思いますので、一報頂ければと思います。本日は大変勉強になりました、ありがとうございました。

川瀬

新しい価値観に出会える国際交流の素晴しさを身を持って、長い間感じております。姉妹都市に関しては、先ほども申し上げましたとおり、「ど

うなんだろうか」と思っておりましたが、毛受先生のお話などを伺っておりましたら、まだまだやることはたくさんあるのだと、とてもやる気になりました。それで具体的なことを考えなければという思いになり、先ほど、ネットを使って交流できるのではないかと申し上げました。現



場に行くことの重要さは重々分かっているつもりです。しかし、現地に行くことができなくともできることは何かと考えます。水戸市は本当に恵まれていて、ここ国際交流センターのような場所があります。他の都市には国際交流関係のこのような場所はあまりないと思います。国際交流活動にはコーディネート役がとても大事だと思います。この協会には、すでにスタッフの方々がおられます。もしスタッフの方やコーディネーター役の方が忙しくてとても大変だということであれば、市民の中から国際交流活動に興味のあるボランティアを募って、コーディネーターの研修を受けさせ、コーディネーターに育てられれば、この交流活動はより活発になるのではないかと思います。今後に期待したいと思います。

呉

重慶市へのアクセスについては、東京と名古屋から重慶まで直行便があります。

先ほど、川瀬さんが話されたように、学生間の交流だけでなく、もっと多様な交流があるのではということに関してですが、私は重慶市と水戸市の家庭文化の分野で交流ができると思います。重慶市は男女平等が良く行き渡っています。男も女も仕事を持っております、夫婦で先に帰宅した方が食事の仕度をします。男性も女性もとても優れたコックの腕前も持っております。今回私と一緒に来日した者たちも、私を含めて、みな料理上手です。このような家庭文化分野での交流は良いのではないかと思います。水戸市の男性の方々には、ぜひ重慶の家庭をご覧頂き、重慶の男性の価値を見て頂きたいと思います。特に、職場における地位が、妻の方が夫より高い場合の家庭文化をご覧頂きたいと思います。

先ほど質問のあった国際交流における言語の壁の問題ですが、水戸市と重慶市の交流は重慶市と他の都市の交流よりも有利な点があります。私は今回2度目の来日ですが、日本語を話すことはできません。しかし両国の文字は似ているので、文字を書くことで理解し合えることができとても便利だと思います。現在、重慶市の小学校では英語だけでなく、スペイン語、日本語などの外国語の授業が取り入れられています。

最後になりますが、本日ご出席の四川省出身の2名の方の重慶市に対する愛情と関心を寄せる気持に対し、心より感謝します。ぜひ四川省に帰る機会がありましたら、重慶にいらして下さい。

毛受



なことが、色々な人に、色々なインパクトがあるということが皆さんのお話に出て参りました。姉妹都市交流というのは、交流することによってその人の人生を変えてしまう位、大きな力があるものと思います。言葉の壁をどうするかということの質問についてですが、言葉の壁、文化の壁があるとコミュニケーションがうまく行かない、しかし、ある意味逆説的ですが、それこそが重要であると思うのです。日本人同士だと、簡単にスムーズにコミュニケーションできてしまうのですが、それは非常に簡単、というか壁が無いだけに普通の交流になってしまい、言葉のあるいは文化の壁があるからこそ、それを乗り越え気持が通じ合えた瞬間というものが、その人にとってもの凄く大きな感動になると思うのです。文化の壁を乗り越えて心が通じ合えたという気持ちが、例えば、ホームステイの後の別れの時に、涙を流すという感激に繋がる。壁があるからこそ、その壁を乗り越えるにはエネルギーが必要です。そういうことにチャレンジしようとすることが大事ではないでしょうか。特に若い人たちで今、問題であるのは、海外に行って交流するよりも日本でのんびりしている方が良いとか、そういうのは面倒であるという方がいますが、新しいことにチャレンジする気持ち、外へ向かせる気持をぜひ持ち続けてほしい。壁を乗り越えた時に新しい世界が見えてくる、そういうものであると思います。そういう意味で、国際交流、姉妹都市交流は無限の可能性があると私は信じています。今日皆様のお話を伺いながら、そのことを改めて確信しました。

最後になりますが、今回この企画をされた水戸市の国際交流協会のスタッフの方々には、私のところにおいて頂き、非常に熱心にお話をして頂きました。今回のパネリストの人選にも、相当頭を捻ってお考えになっていました。私はこういうところへ出て話をする機会が多くあるのですが、今回のスタッフの方々は本当に一生懸命にされているというのが、非常に印象に残っています。

ありがとうございました。限りある時間の中で、姉妹都市ということについて、様々にそして率直な疑問をお出し頂き、それに対してそれぞれの現状をお話し頂きました。一方、姉妹都市の可能性について非常に明るいお話もございました。国際交流・姉妹都市交流の中で、色々

ます。その成果もあって、本日すばらしい話し合いができたのだと思います。

それでは最後に、皆様よりパネリストの方々に再度、拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

ご意見・ご感想

ご意見・ご感想

今後、どのような姉妹都市交流を期待しますか？

- ・30年ほど前から茨城大学に留学生が来られて（特にアジアが多い）、水戸市内の小・中学生との交流を8年間してきた。今はジョングエンさんみたいに各国で活躍しているのではないかと思い出した。
- ・目的を明確にした（課題型）訪問団派遣を行ってほしい。
- ・もっと市民に参加しやすい姉妹都市交流であってほしい。
- ・一般的な訪問交換だけでなく、具体的なテーマが共通の交流がいいのでは。
- ・特定の人のみが関わりを持つのではなく、本当の意味での草の根交流が必要ではないか。これが国際交流を長続きさせる方法だと思う。
- ・姉妹都市締結時、水戸市はどういう原則に基づいて行っているのか、今一度考える必要があるのではないか。政治と民間交流は区別して考えた方がよい。
- ・多くの人に門戸が開かれた交流。「20代若手社会人の交流」「大学生の交流」「60歳以上のシルバー交流」など、参加対象を区切って行う交流のイベントがあると参加しやすいのでやってほしい。
- ・幅広い年代が姉妹都市交流を体験できればいいと思う。
- ・市民団体相互による交流に輪が広がることに期待している。折しも11月に団体紹介展が実施されている。
- ・アメリカ人と日本人が考える国際交流の相違点は何か。
- ・中国人との国際交流は日本の市民団体が考えている交流ができるのか。
- ・外国人と接する場としての水戸市国際交流センターの役割は大きいと思う。多種多様な行事の工夫、市民参加（備前町内を大切に、日々の身近なところから）を根気よく継続すること。センターの利用者の増加がそのまま国際交流の発展になってくると思う。
- ・色々なグループ（N P Oや趣味のグループ）がもう少し簡単にアナハイムや重慶と交流ができるといい。
- ・市民レベルの具体化。
- ・継続性のある交流。
- ・環境問題が重要。こどもたちと共に今の地球を守る為のプロジェクトを考え、実現した方がいい。日本の古き良き文化を日本のかどもたちにも認識できるように、深く広く企画実行したらいいのでは。

ご感想をお書きください。

- ・国際交流のあり方を見直すのによい機会でした。ハッピーなひとときでした。
- ・姉妹都市交流を見直すべき時期にきてるので、良い企画だったと思う。水戸市も姉妹都市委員会を市民主体で立ち上げ、これから活動を検討してほしい。
- ・重慶からいらした方も含め、パネリストの選出は難しく、限られた時間内で異言語の方たちのディスカッションは難しいと思った。担当の方たち、大変だったと思います。
- ・もう少し参加者が多いと予想していたが、予想外に少なかった。
- ・祭りなどを通した交流、ガーデニングなど身近なものからの交流と様々な形があることを学べたのは勉強になった。幅広く今後も姉妹都市交流を進めていってください。
- ・貴重な講演を聞くことができ、参加してよかったです。
- ・国際交流は目的ではなく手段であるという言葉にもやもやがすっきりした。
- ・姉妹都市交流は行政主体というイメージだったが、市民レベルの交流の可能性を示して頂き、姉妹都市交流の意識を理解することができた。一市民として、活動の輪を広げていきたい。

水戸市市制施行120周年記念 国際姉妹都市交流シンポジウム
これからの姉妹都市交流のありかた
－市民主導の交流に向けて－

発行者 財団法人水戸市国際交流協会
〒310-0024 水戸市備前町6番59号
電 話 029-221-1800
U R L <http://www.mitoic.or.jp>
制 作 パーク株式会社
発 行 2010年2月



Mito City International Association
財団法人 水戸市国際交流協会